

恁麼

一、胎動

一条の光とて届かぬ闇の底は、茶褐色の流体が汚泥のように、緩やかに蠢いていた。流体は、ところどころ渦を巻いて、相混ざり合い溶け合つては、腐臭を放散していた。腐臭は、流体の声なき悲鳴だった。流体は、主体が解体して拡散して空間と化したものの為すうねりで、その苦しみの表明として、流動をしていたのだつた。流動しては悲鳴を上げ、腐臭としての気泡を、全世界たる混濁の中に、放出していた。

拡散していた流体が、次第に合一して核を為したのは、合一によつて個々の流体が、幾らか苦しみを軽減できるからであつた。合一は必然的時間の流れの中で起つた現象だった。合一するときに苦しみの声を一頻り気泡として絞り出すと、その叫びの分、合一した流体は安樂に一步近付くのであつた。なので、混濁

汚泥の各所各所で、引力が生じつつあった。合一した流体の数が多ければ多いほど、引力は巨大化した。巨大な引力は、いよいよ周りの小流を併呑して、拡大していった。

すると、汚泥の中に、毬藻のような球体が、散在することになった。毬藻は、各々の周りの汚泥を吸収して、それぞれ巨大化していった。その毬藻は、合一の度に臭みとしての気泡をぶくぶく放散しながら、自身はエゴイズムとして生長していった。エゴイズムとは、次第に自分の毬藻の体を巨大化しようとする欲であつた。大きくなればなるほど、毬藻の中は、苦しみを絞り出した安楽空間となるので、各々の毬藻は、内なる安楽をそれぞれ主張し合つていた。

一方、毬藻の生長の代替として放散される気泡の中には、苦患が充填されていた。発せられた許多の苦患の気泡は、同質のもの同士なので相混合して、毬藻同様、集合合体して巨大化した。巨大化した気泡は、苦しみの声の塊として、安楽空間の毬藻から撥ね除けられた。つまり、毬藻との間に斥力が働いた。毬藻は、暗闇の底の中の寂寥空間に、静かに滞つていたかったので、底に沈んだまま動こうとしなかった。結果、苦患の

気泡は、汚泥流体の中を、上昇していくことになったのであった。

その結果、ぶくぶく気泡を発生して巨大化する毬藻が底に漂って犇めき合い、気泡は集合合体して、どんどん上昇していった。毬藻と気泡の異なるところは、気泡はエゴイズムを持たない苦しみの声に過ぎなかったのに対し、毬藻は、エゴイズムの塊だったところだ。毬藻は、流体の汚泥を引き寄せて吸収したが、各々の引力を競い合って巨大化していたため、それら同士が合一することはなかった。各々の中に、各々なりの快適空間を形成していて、それは、お互い不可侵だったのである。

各々の毬藻は、中に安楽を閉じ込めていたため、少し浮力が働いていて、重力の影響をあまり受けずに、底から浮き上がっていた。そして、汚泥の緩流に乗って、緩やかに移動していた。しかし、移動しながらも、飽くことを知らずに汚泥を吞飲していたため、毬藻はどんどん肥大化していった。なので、やがて毬藻同士がぶつかり合って干渉しだした。毬藻は、隣の毬藻とぶつかりると、衝撃を受けてその表面だけしばらく凹んだ。それは、内なる安楽空間に影響を及ぼした。安楽空間に、衝突の時だけ、鮮やかな色が付いた。そして、凹ん

だ部分から内面全体に、鮮明な原色が行き渡り、原色一杯になると、やがてその色圧により凹みも膨らんで、再びもとの球形に戻り、それと共に、色彩ももとの褐色に戻るのだった。毬藻は、その衝撃の快感に感動した。毬藻は、衝突の快楽を知ったのだった。それで、衝突した毬藻は、自分の意思を持ち出した。快感を得るために、態と周りの毬藻に衝突しようと、泳ぎ出したのだった。

ぶつかつた経験を持つ毬藻は、周囲の毬藻にどんどんぶつかつていつて、色彩の快楽を伝えていつたので、毬藻どうしの衝突は、一挙に闇の底全体に拡がつていつた。毬藻は、快楽の虜になり、こちらの毬藻にぶつかつては紅に色づき、また他の毬藻にぶつかつては碧に輝き、を繰り返した。闇の底全体が、深更の空に浮ぶ場違いな花火のように、輝かしくも虚しく、散り照つた。

そうしている間にも、汚泥が毬藻に吸収されて、苦患の気泡が上方に向かつてぶくぶくと浮び上がつていつた。上方には、斥力によつて浮び上がっている巨大気泡が浮んでおり、それに向かつて毬藻の汚泥の呑飲によつて生じた気泡が上昇しては併呑されていつた。巨大気泡は、底に流動する毬藻と対峙して、大きな苦患空

間となつて現成した。つまり、苦患の空と快樂の沼が、世の底を二分したのだった。

しかし、この世の大沼は、底が深かった。苦患気泡は、この全大沼の遙か上方にあると思われる表面まで達したわけでは無かった。大沼には底はあつたが、表面があるかどうかは知れなかった。底の毬藻群の斥力の及ぶ限りの上方には押し遣られていたが、気泡の中味は苦患だったので、浮き立つようになつては行かなかつた。重力の作用するがままに、下の毬藻群に押し載つていた。毬藻群は、いよいよ巨大化して数を増し、相ぶつかり合つて快樂のままに泳ぎ回つていたので、そのような苦患を上方に押し遣つていたのだが、苦患はどんどん重苦しく溜まつていくため、掛かる重力も漸増していき、斥力と重力が拮抗していたのだった。巨大苦患空間と、毬藻群生空間が、逼迫しあつていた。

大沼の底は広漠としていた。どこまで行つても茶褐色の汚泥状の流体が、尽きること無く流動していた。しかし、毬藻はその広漠とした汚泥の隅々までに発生していて、底を埋め尽くしてしまつていて、都合、苦患気泡は毬藻に積み重なつた層として、大沼に沈んだ状態に成つていた。底空間は、水平方向に限りが無かつた

が、その限りなさを上回る毬藻が発生していたので、大沼の底は毬藻だらけになっていた。大沼の果てはどうなっているのかは、今はまだ見えなかった。

苦患気泡の上は、やはり茶褐色の流体があつたが、そこには毬藻は発生していなかった。何故なら、解体された主体の苦しみは、その重さ故に大沼の底からの重力に引き寄せられていて、上方の沼水には存在しなかったからである。上方には、主体がもとよりない、ただのあるがままの沼水が漂っていた。それは、毬藻のエゴイスティックな安楽空間と対蹠的な、菩提的な静謐安楽を持った浄水だった。

浄水の沼水は、茶褐色ではあつたが、エゴイズムのない分、透明だった。即ち、光を通した。何故光を通したかと言えば、沼の上方から、光明が降り注いでいたからであつた。沼の遙か上方に、煌めくような光源があつた。そこから降り注ぐそれは、音声であり時間であり真実であり光明であつた。つまりは、経文が降り注いでいたのだつた。

経文とは、地獄の有情無情を目覚めさせて預流向に導き、預流果からの四沙門果を経て無上菩提へと導

く、崇高でパワフルな宇宙の法愛だった。法愛とは、宇宙が隅々まで仏であるが故に、無償の営みとして降り注ぐ、大慈悲のことである。全ての現実には、真実であるが故に、仏性を持っていた。だから、即応して経文が降り注ぐのであった。

言い換えれば、大沼の汚泥は、すべて耳で出来ていた。水面の遥か上から降り注ぐ、光明たる経文を静かに聞いていた。経文を聴きつつずっと漂っていたので、いつしか耳は文字通り芽吹き始めた。許多の微細な耳の粒から、経文を聴いて生育し出した仏性が、芽となつて上方に伸び始めていた。五百万億の発芽した微小耳粒が、細い茎を上方に伸ばして、相絡まり合つて伸び上がつていった。それは、十本が一本、その一本がまた十本集まつて一本になり、次第に太くなつて上方に伸び上がつていった。それは、仏の樹だった。

二、光明

苦患気泡層の上で、仏の樹が生育しつつある頃、大沼の底では、いよいよ毬藻同士の衝突が激化して、カラフルな色彩がネオンの電飾のように、豪華に輝いていた。沼底に発する光は、天上からの光明とは本質的に異なり、けばけばしかった。天上の光明が、地獄を菩提に導く透明な法愛であるならば、沼底の発光は、毬藻を迷妄に陥れる混濁した欲望であつた。毬藻は、快感を貪ることに突き動かされて、色とりどりの発光を繰り返した。その衝突は激しさを増し、色彩の濃度も大きくなっていった。そして、ついにあるとき、毬藻同士の衝突により、毬藻の外殻が破損して、中の安楽空間に周りの汚泥が入り込む事故が起つた。そのような事故は、非選択的に、同時に、あらゆるところで生起した。外殻を破られた毬藻は、色をすぐさま失つて、途端に主体性を失い、巨大な苦患気泡を上方に泡立たせた後、他の毬藻の餌食となつて消え失せてしまふのだつた。つまり、毬藻同士のつづし合いが始まったのだつた。潰れた他の毬藻の残骸を吸収した毬藻は、不可逆的に色付いた。ただの衝突の時は、衝突の凹みが弾性によりもとに戻ると、毬藻の色付きも泥色に還元したが、他の毬藻の残骸を摂取した周りの毬藻達は、色を内包するようになった。捕食する毬藻の帯びる色

彩は、餌食になったものと毬藻と異なつて、同じ餌食毬藻を別の捕食毬藻たちが分け合つて吞飲しても、その捕食毬藻それぞれによつて異なつた。つまり、色とりどりの色彩を持つた毬藻が、あちらこちらで形成されつゝあつたのだつた。

この毬藻の有色彩化は、毬藻達に更なる悦樂を齎した。衝突で色付くのは一時的だったので、悦樂も暫時だつたが、毬藻残骸の吸収による色彩取得は、その毬藻に持続的な多大なる悦樂を齎したのだつた。なので、有色彩化毬藻は、ますますエゴイスティックになつていった。悲しい哉、エゴイズムとは、快感の所産であることよ！ 知らぬが仏とは、このことであつたか。毬藻同士の、肉弾戦が始まつた。激しく衝突し合つては、煌めきを放ち合い、快感に打ち拉がれつゝ、弱い毬藻が巨大氣泡を浮き上がらせつつ果てると、それらに群がつて吞飲しあう浅ましき毬藻群。もう、誰も彼らを止められない。彼らは、色彩の虜と化して、悦樂を貪り合つた。

他の毬藻を食い散らかす度に、その毬藻は色艶を増していった。鮮やかで派手な色彩になつていった。その

派手派手しい毬藻は、他の弱い毬藻を貪食して、巨大化していった。その結果、派手な色彩の毬藻だけが生き残った。そして、派手な色彩を内圧として、上方の苦患気泡の重力に耐えていたのだった。それは、一見色鮮やかな美しい生命の流動だった。毬藻は、エゴイズムを持つている点において、生命と言えた。その輝きは、上層の苦患気泡に抵抗して、精一杯カラフルに、一つ一つ異なる色彩で、輝き流れた。色彩の付いた珠玉の流動のようだった。苦しみの溜まった気泡の下で、その流動は暫時の栄華を尽くした。しかし、毬藻も、やがて衝突や貪食に倦んできた。また、巨大化して、動きが緩慢になってきた。激しい衝突が出来なくなり、内圧を保つのが難しくなっていた。つまり、時とともに、色が褪せだしたのだった。

こうなると、毬藻は脆く、あちらこちらで巨大な悲鳴の気泡を上げつつ、潰滅していった。毬藻が破裂して、その中の極彩色が周囲の汚泥に溶け出して混じり合い、黒濁した粘質性のタール質に成って固まっていた。あちらこちらで、巨大毬藻の潰滅が始まると、苦患気泡はますます重く、残った巨大毬藻に押し掛かってくるので、全ての巨大毬藻が潰滅するまで、そんなに時間は掛からなかった。そして、全ての毬藻が潰滅の

苦患を上層に預けてタール質化したとき、苦患の気泡層は、ますます厚さを増して重く押し掛かり、タール質をコチコチに硬化させた。苦患の気泡を上に乗っていたが、タール質層は苦しみが無いわけでは無く、苦患気泡に堅固に圧迫されて、いつ苦患そのものと同化するかわからないという危機感と恐怖感に満ちた、絶望的底面と化していた。そこは、気泡の重力と苦患の恐怖に圧迫された、一つの大地獄だった。

大地獄が形成されたときに、上方の透明流体層では、いよいよ仏の大樹が上方に向けて、その幹を伸ばしつつあった。五百万億の耳粒から萌芽した仏性を集めた大樹は、尚も周囲の新芽を合流させて、幹を巨大化させていた。幹の裾は、根のように細かく分岐した耳粒からの芽だったため、光明は遮られてますます地獄層に届きにくくなり、タール質底面は、しばらく恢復の余地が無かったのだった。

しかし、本来仏性とは何であつたか？ 苦しんだ有情無情に慈悲を垂れるべくものではなかつただろうか？ 仏の大樹は、生長するにつれ、意思を持ちだして、そのように悩み始めた。光明を受けねば自らの仏性は向上しない。しかし、仏性が向上することと、地獄の有情無情を見捨てることとは、どちらも選択肢と

して一方だけを選べるものではなかったのだった。地獄の有情無情を見捨てての、仏性の生長はあり得なかった。仏の大樹は、地獄の有情無情を、救う意志を持ち出したのだった。

具体的には、光明が届くような、道管を大樹の中を通して、根を苦患気泡の中に突っ込んでいった。苦患気泡は、苦しみの固まりなので、突っ込まれた根っこはすぐに苦しんで壊死してしまった。しかし、それでも肉弾戦をやるかの如く、大量の細根を伸ばして、苦患層を突き破ろうと、仏樹は懸命に根を伸ばした。仏樹の上方は、静謐な光明に包まれていたが、下方の細根は、絶望的な苦患に圧迫されて、壊死しては延びを繰り返した。

苦患気泡層の上層は、程なくあちらこちらに林立する仏樹の細根に覆われた。苦患気泡は、仏樹から次々に延びる細根によって、次第にその鉛のような純粹な苦悩の重量が、薄まっていった。仏樹は光明を道管を通して遙か上方から苦患層に伝えていたので、その光明により、苦患の純度が中和されていったのだった。すると、苦患気泡の重量が軽く成りだして、その下の毬藻潰滅タール質層が息づき始めた。そのタール質の出

自は、もともと主体の解体した残骸だったものが、再び集結してエゴイズムとなったものの崩壊した、更なる残骸だっただけに、その性質がドロドロしていてエゴイスティックだった。エゴイスティックなのに、苦患の重量性と同化の危機感で抑えつけられていたに過ぎなかったため、また性懲りも無く貪りを始めた。つまり、潰えたはずの毬藻の残骸として残っていたエゴイズムが、息を吹き返して細粒化し、それぞれ我先にと光明を貪り始めたのだった。つまり、細根を食い千切り始めたのだ。細根は、食われても食われても、痛みを堪えつつ、慈悲の心で薄まった苦患層の中に、伸張していった。

細根は延びるごとに苦患気泡のために壊死してはその重量性を薄め、また苦患層に飛び上がって引つ摺むタール質のエゴイズムに奪取された。そうこうするうちに、タール質の地獄の細粒は、苦患と同化する危機感も重量に潰滅する恐怖心も無くしてしまつて、暴れ放題になつてきた。つまり、漆黒のタール質層が、触手を伸ばして仏樹の細根に絡まりつき始めたのだった。

タール質の粘質性のエゴイズムは、相当汚らしかつたので、仏の光明が細根を通して届いても、なかなか仏

性が芽吹かなかった。ただ、細根の静謐な安楽を食って、肥え太っていった。もはや苦患気泡は、薄まった分軽くなつて上方へぶくぶくと昇天していつて、タール質の上から無くなつてしまつたが、その分、抑えられなくなつたエゴイズムのタール質が、仏樹の下方から絡まりついて、仏樹を犯しつゝあつた。仏樹は、底の辺りとても痛い思いをしつゝ、尚も上方に向けて、光明を受けて生長していった。

三、地獄

この仏樹とタール質の世界の果てがどうなっているか、それは神仏のみの知れる叡智だつた。際限なく続く大沼の底の広さには、全く限り無く、どこが端でどこが中心なのか、まるで偏りが無いからである。安易に考えると、永遠とか無限とかは、どこかでループを為していると考えがちである。しかし、それは人間の陥りやすい認識の誤謬に過ぎず、無限であるものは文字通り限りが無いのだった。限りが無いというのは、言わば

この世を称するのに全てだと言うことである。全てというものは、何らかの主体が認識する全世界のことであり、ここではもともと主体が大沼の底で解体して既に無数になってしまっているのです、それは百千万億を越える無限数の主体の認識世界の寄せ集めであり、要するにこの小説世界すべての広がりだった。

ところで、均質に仏の大樹とタール質層が積み重なっているのかと言えば、あながちそういうものでもなく、局所性も保持しているのだった。局所性とは、そこだけタール質が優勢であったり、あるいは仏樹が打ち勝って大沼の底に達していたり、そういう不均一性のことである。しかし、鉛直方向には、少なくとも、大沼の底があった。底はタール質で覆われていたが、それを支える絶対的な大地が存在していたのだった。その上に、広漠とした大沼が横たわっていたのだった。

ここに一本の仏樹があった。他の仏樹同等に、地獄のタール層に絡まりつかれ、そのタール質と言わば戦いながら、しかもタール質に光明を送り届けながら、自ら沼の上方に延びつつあった。タール質に光明を伝えることは、いわば菩薩道にあたる行為なので、仏性の芽が良く伸びた。そして、他の何本かの選ばれた仏樹同

様、大沼の表面たる水面にまで到達することが出来たのだった。

沼の水面の上は、冷たい空気に満たされてはいたが、光明が燦々と照り輝いていた。沼の底の広さは際限が無いと書いたが、水面上には沼の岸が見えた。光明は、その岸の奥に聳える小高い丘の上から降り注いでいた。小高い丘の裾は、グラデーシヨンのように峰から裾野まで、赤から紫に色が七色揃って、華が咲き乱れていた。微風が吹いて、その草花のたなびく様は、天国があつたらこんな風だろうと思わせる明媚な風景だった。

丘の上には、大日如来様が鎮座していた。大日如来様と言っても、所謂人間の形をした、あの如来様では無く、それは一輪の黄金色の華だった。なぜ大日如来様がそんな異形なのかといえ、如来様が普門示現だからだった。この世の有情無情に受け入れられる形を取るのが、如来様の普門示現という善巧方便なのだ。大日如来様は、黄金色の花卉から、音にならない声を発していた。それは風であり空気であつた。峰から裾野の花々は、その風にたなびいては、ますます彩りを鮮やかにして、共に揺れ合った。

しかし、よく見ると、花々の花卉は耳の形をしていた。緑色の茎の上に、色鮮やかな耳朶が咲いていた。そして、黄金色をした耳朶華の大日様から、震動して流れてくる静かな声を、その耳道の中に導き入れて、中の鼓膜を震動させていたのだった。鼓膜の震動は、黄金華如来の声に同調していて、声の震えに任せて、その振動を茎から根へと伝えて、草本全体で感動していた。

そのような光景を、初めて水面から出でた仏樹は、目の当たりにしたのだった。仏樹は、この天国の感動を、どうにか地獄のタール質に埋もれる、濁った主体達に伝えたかった。しかし、仏樹の先端が到達した水面と、沼底深くの地獄面との間の隔たりは、距離的にも心理的にも、かなりの大きさであった。仏樹の根に今も絡まりつくエゴイスティックなタール質の、ちつぽけな快樂から比べて、この天上の広さ静かさ安らかさといったら、天文学的差異があつて、まさに憐れみを垂れなければ、仏樹自体が成り立たなかつた。仏樹は、中の道管要素を少しづつ太く大きく生長させて、如来の玉音の震動を、地獄に伝えたのだった。

地獄のタール質は、その震動には気付かないくらい、粘着質を備えたぶよぶよの塊だった。だから、いく

ら天上の静謐な如来の玉音を伝えても、感動など出来る余地が無かった。タール質は、自らのエゴイズムを満たすことしか、念頭に無かった。それで、仏樹の根に絡まりついては貪食して、取り憑かれたように快楽を求めた。それは、一つの飢えだった。タール質は、餓鬼道の一形態だったのだ。飢えているから、仏樹の根を貪り当面の苦しみから逃れようとする。しかし、タール質の本質的な苦しみの解決のためには、ひたすらに貪食ばかり繰り返すことは、何の用も為さなかった。だから、如来の玉音すら、豚に真珠だったのだ。

仏樹にしてみたら、根の貪食される痛み苦しみが、地獄のタール質の飢餓の苦患そのものだった。黒タール質の苦しみに感情移入できるだけの余裕は、充分すぎるくらいあったのだった。だから、どんどん、仏樹の根を食われても食われてもめげずに伸ばして、黒タール質に与えた。それは、飢えた虎の苦しみを軽減させるために、自らの身を投げた太古の菩薩様と、同じ精神だった。仏樹にしてみれば、自らは無くなっても一向に構わなかった。もとより、空がこの浮世の真の姿だからだった。無くなつて空になつても、仏性は失われないのだった。

だから、惜しみなく、自らの仏性の幹を、黒タール質に分け与えた。すると、黒タール質はやがて、地獄の底から増幅して、バルクのゴム質となつて、盛り上がつてきた。水面上に伸び出た仏樹すべてが、同じ慈悲を垂れたので、あちらこちらでバルクのゴム質が、仏樹の幹の下方を食い潰してぼこぼこに膨らんでいった。地獄の餓鬼塊は、悲しい哉、飽くことを知らなかった。醜く貪り肥え太るだけだった。沼の底は、ほどなくゴム状の餓鬼塊になつた地獄のタール質に、埋め尽くされていった。地獄のタール質からしてみれば、貪食しまくれてエゴイズムを満たすことが出来、俄に快樂を謳歌していた。タール質からゴム塊になつたぶん、少し救われた形状と化したのだつた。それは、仏樹の慈悲が届いた結果だつた。地獄の底は、少し上がったのだつた。

ゴム塊は、仏性の細根を大量に摂取していたので、少し罪悪感の種が植わつた。自分のことさえ良ければいいはずのエゴイズムの塊であつたタール質から比べると、かなりの進歩だつた。しかし、それは仏性と呼ぶには程遠い、かすかな疼きだつた。要するに、貪食する対象の細根に、たおやかさを感じたのだつた。どれだけ奪取しても仕返ししてくること無く与え続ける仏樹に、優しさを感じたのだ。優しいものを殺傷しても、それ

ほど罪悪感も湧かないほど、タール質は飢えていたのだが、少なくとも、仏樹に親しみを覚えた。親しみを覚えて、えつつそれを舐し喰らうことで、食欲の満たされる悦楽が親近欲と相俟って、強めあった。なので、ゴム塊となつたタール質は、ますます悦楽を貪るようになり、細根に発情しだした。発情しながら、細根を舐し喰らっていた。

それは、ゴム塊の快楽を増幅させた。舐し喰らうことで、異常性欲が満たされたのだつた。ゴム塊は、仏性の細根に性的美を見出していた。喰らい続けることで、異常に興奮していき、ゴム塊は膨れあがつて勃起した。そして次第に起き上がり、ぼんぼんにはち切れんばかりに硬くなつた。そそり立つて、仏樹に纏わり付きながら、枝のように上に延びた。それは、地獄のペニスだつた。仏樹に絡まりついたゴム塊のあちらこちらで、地獄のペニスの勃起が生じていた。ゴム塊から、硬い突起があちらこちらに飛び出てくるのだ。ゴム塊は、すでに苦患の気泡層から解放されていたので、奔放にあちらこちらに勃起した。そして、みるみるうちに大きく硬くなつていき、牛の角のように硬く突き出ていった。地獄のペニスと化したゴム塊は、飽くことを知らなかった。

仏樹に発情して求め貪り、角のペニスをどこまでも巨大化させた。地獄のペニスの挿入される穴は、しかしながら、存在し得なかった。地獄のペニスたるゆえんである。満たされることは、決して無いのだ。仏樹は、貪り食われる痛みと同化しながら、地獄のペニスにまで、憐れみを垂れた。どんなに食つても、満たされることの無い性欲。それは、タール質の餓鬼道と変らぬほど辛い地獄であつただろう。

一方、仏樹の方は、そんな中でも天上からの光明を、道管を通してゴム塊に伝え続けた。その道管の末端の細根のおやかさに惚れ、食い殺しては発情する地獄のペニスとは、有り体に言つてしまえば、光明たる如来の玉音に恋したということだった。仏樹は、如来の声の伝導体でしか無く、それをいくら喰らつても、地獄のペニスは如来の光明を抱くことが出来なかった。ただ、発情して、ゴム棒をいたずらに膨張硬化させて、上に伸び行くのが精一杯だった。しかし、いくら伸びても、地獄のゴム塊が水面に届くほど、大沼は浅くなかった。また、仏樹の素の耳粒のような、純粹さを持たないので、ゴム塊は、仏樹の隙間からほのかに泥水を通して届く、水面上からの直の光明自体は、聴き分けることが出来ずにいた。つまり耳とは成れなかったのだった。

四、流出

さて、限りの無い大沼の底と書いていたが、地獄のペニスがあちらこちらで生長しつつある頃、大沼の泥水に流動が起こり始めていた。大沼の底のどこそここの箇所から、渦巻いて泥水が吸入されて底の更に下に、流動しつつあったのだ。要するに、大沼の底が破れた。数箇所から底が抜けた。大地が割れた。大地とは地藏菩薩の象徴される太母であった。地獄に救いを差し伸べる唯一の菩薩である地藏様が、破れてしまったのだ。沼底は、底が抜けてどこまでも下へ沈んでいくことになってしまった。

地獄のタール質は、全て残らず、エゴイステイクに細根の貪食をして、ゴム質化して仏樹に絡まり付いていたので、そのときに地獄の底に残っていた流体は、タール質層上層にあった透明な褐色の泥水である、まだ未分化の耳粒ばかりだった。それらは、エゴイズムは持たなかったので、大地の渦流に飲まれても、そんなに苦痛

を感じなかった。むしろ、大地と同化出来ることを、運命論的に喜んだのだった。

大沼は、相当の広さを誇っていたので、水位は全く低下しなかった。なので、天上の美しい景色は、殆んど変化していなかった。ただ、寒風がどこからか吹き出した。寒風は、如來の聲が耳朶華に届くのに、少しばかり罣礙した。耳朶華は、寒風に靡いている間だけ、玉音を聴けなかったのだ。しかし、寒風はそれほど強く吹き荒んでいたわけではなかったので、通り過ぎるとまた耳朶華は光明の恩恵に預れた。

しかし、玉音を聴くことも、エゴイズムの一態であることを、玉音を聴いている耳朶華であれば、誰でも安易に気付いていたので、寒風に吹かれることも、それほど嫌がるわけではなかった。他の華々の盾になって、風に当たる耳朶華は、出来るだけ踏ん張った。踏ん張ると、耳朶華から沢山花芽が吹き出て、それが開花して新しい耳朶華が群生するので、風はそこで吸収された。つまり、輪生した耳朶華群の耳道に流入して、その耳朶華を強かに冷やしたのだった。

すると、その耳朶華は、凍て付いて固まってしまい、もはや玉音に耳を傾けられない状態に成るのだった。

そのように、寒風に凍結する耳朶華が、あちらこちらで散見されるようになり、寒風は天国の草原に変化を齎したのだった。しかし、その変化は、天国の平安を崩し得るほどの破壊力など、何一つ持ちはないのだった。凍結した耳朶華は、凍結を凍結なりに楽しんでいたからだ。

大日如来の丘の上空は、どこまでも抜ける青空だった。しかし、太陽や月に当たるものはなく、丘の上の大日華から放たれる光明以外は、何の光も存在していなかった。丘から空を照らし上げる形となっていたのが、空は自らの明色に色付いていて輝いていた。それは、空は如来の玉音たる光子に満たされているからだ。た。

平和な天国地上の草原だったが、俄に轟音が鳴ったかと思うと、稲妻のようなスパークが、しかも光では無くて翳つて、地面まで走り落ちた。暗黒の闇の稲妻だった。その稲妻の落ちる元の上空は、罅が入って割れていた。天が割れたのだった。安易に想像が付くように、これは大地の破れに呼応した現象だった。つまり、大地と天空は一体だったのだ。

ということとは、地獄の底の破れ口から吸込まれた泥水が、上空の罅割れから流れ落ちてくると言うことである。大沼の底の泥水は、たいそう汚い色をしていたので、罅から滴り落ちる雨も、この上なく汚い泥色をしていた。美しい明色の天国の地上が、地獄の泥水で汚されてしまった。闇の稲妻はあちらこちらで起り、明色の美しき天空に穴を空けた。そして、地獄の泥水が、天から雨となつて降り出したのだった。

轟音が鳴り響いては空が裂け、泥の雨は次第に激しくなつていった。大日の丘の麓の耳朶華たちは、泥水でカラフルな彩りを汚されてしまった。虹色の草原は、あつという間にその表層を泥色の雨水でコーティングされてしまった。

かくして、天国の虹色草原は、泥色に染まった。如来華も同様に泥色に染まった。世界が、泥色の雨で覆われてしまった。しかし、以前に述べたように、大沼の地獄の底は、際限が無かった。水面上に上がると岸があり、その上に明媚だった如来華の丘が広がっていたのだが、大沼の底は、水面上のように秩序立っていないかったのだ。

「カオス」という言葉が、あるいはぴたりくるかもしれない。大沼の底は、水平方向には際限なく拡がっていたのだった。これはどういうことかというところ、沼水が際限なく存在すると言うことであり、今やタール質がゴム質化してしまっていたので、少し透明度のある耳粒の泥水が、天空のあちらこちらの罅割の隙間から、流れ落ちて来ていたのだった。

罅割から流れる泥水は、闇の水だったのでとても冷たかった。なので、光子に囲まれた暖かい天国の国土の空気に寒風を巻き起こして、吹き降ろした。要するに、闇の稲妻に泥水の暴風雨という天候の国土になってしまったのだった。

暴風雨は、光子を隠して天国を暗黒の国土に、変化させてしまった。凍て付くほど冷たく染汚されたがごとく濁った暴風雨は、際限なく如来華の国土に降り注ぎ、そのために大沼の水位は上がっていった。大日の丘の麓の耳朶華は、水位の上昇により、大沼に飲み込まれていき、あつという間に、大沼は世界を覆い尽くしてしまった。小高い如来華の丘のみが、孤島として沼の上に浮んでいた。大日の島には、ただ一輪、如来華が泥

水を被ったままで、萎れ掛かつて佇んでいた。空に充滿していた光子も、泥水と光子のミセルとなって効力を失い、国土は地獄に支配されつつあった。

しかし、大地に吸収され天上から降った泥水は、みな耳粒だったので、光子の周りから耳を傾けるようになり、仏性を芽吹かせ出した。光子の数は、泥水ミセルの数しか無かったので、周りを取り囲む泥水は中心をめがけて、耳を傾けて仏芽を伸ばしだした。それは、一見耳粒による光子の争奪戦のように見えたが、決してそうではなく、光子は遠慮の塊のドイツシュのように、誰も手を付けられずに仏芽に護られるように囲まれて浮んでいた。光子は、それ自身は説法出来なかったが、仏法として耳粒を感化できたので、耳粒ミセルは、三層に別れた曼荼羅のような構造になった。中心に、光子としての如来様、その周りに感化された菩薩様としての仏芽、その周りに菩薩様から教えを伝道される対象としての有情無情、その周りに空虚な空間。そういう仏国土が、光子の数だけ存在したので、天上の地は全く染汚されることなく、安泰だったのだ。

また、大日島の萎れ掛かった耳朵華も、やがて光明を取り戻すと、そこから放射される光子が、耳粒を

吸着しつつ拡散していくので、耳朶華如来から離れるほど、ミセルの耳粒層が厚くなっていた。耳朶華如来を中心にした曼荼羅世界が現成したのだった。

その大日島の水面下の地獄のペニスは、そのときどうなっていたのだろうか。

五、来迎

大沼の底から流れ抜けていった泥水は、限りなくあつたはずだったのに、ある限界を境に、枯渴した。つまり沼の底から泥水が無くなった。その分、地獄の空気が溜まつていった。地獄の空気は、苦患気泡と同等、重苦しくて沼水の抜けた底に、重畳として積み重なつていった。実を言うと、この地獄の空気は、勃起した地獄のペニスから発散される悪臭が、気泡となつて集まつたものだつた。地獄のペニスは、挿入できるヴァギナがないため、満ち足りることが無かつた。発情してもその異常性欲を満たせる対象が無かつたのだ。だから、むらむ

らとした不快感が苦患気泡としてぶくぶく発散されて、沼底に積み重なりつつあったのだった。

苦患気泡層の地獄の底は、次第に層厚を増して地獄に空を作りだした。地獄が、陸地ある空間と成り果てたのだった。地獄の空間は、重苦しい空気で包まれ、ひび割れた大地から所々仏樹と地獄タール質の成れの果てのゴム根・ペニスが、枯木のように枝を為して立ち上がっていたが、その他は太陽も無ければ蠢く動物もない、殺伐とした国土だった。

仏樹の遙か上方は、大日島に冥資されて仏化した曼荼羅ミセルで囲まれていたため、水面に出ていた時同様、仏樹は道管を伝えていたが、以前と異なり曼荼羅ミセルを運行したため、ゴム塊・ペニスは次第に萎えだした。光子そのものに発情していたのであって、耳粒でコーティングされた光子には、発情できなかつたのだった。

なので、黒き大木の如く枝分かれしてそそり立っていた地獄のペニス群は、あつという間に拉げて、穴の空いた風船のように萎え萎んでいつてしまった。しかも、今や地獄は、ペニス自らの醸し出した悪臭により、苦患の空気の重圧がのし掛かつてたのだ。ペニスは、またもやかつて硬化黒タールの姿だった時のように、苦患に押し

潰されて地面の表面と一体化してしまったのだった。

暗黒の地獄の空は、沼水の層を通して僅かな散光が、注いでいた。その散光とは、光子の曼荼羅ミセルであり、耳粒で覆われていたため、ぼんやりとした灰明かりでしかなかったので、往来がさつな地獄のペニスの感性では、感受しにくかった。かくして、地獄のペニスはすべて押し伏されてしまい、黒き地表面となつて沼底を覆った。鉛色の重い苦患大氣が、その上からのし掛かつて、地獄の主体はまたもや、苦患の直中に押し遣られた。

黒タール層にもどった。ペニス群は、固形物なので沼底の裂け目には、吸い込まれていかなかった。沼底の裂け目は、いまや、日照りで罅割れた大地の如く、あちらこちらに散見されたが、その下は地面の下に深く沈んで行つていて、暗闇の底に続いていた。しかし、先だつて述べたように、この地獄地面の破れ口は、天国天上の上空の罅割れに繋がっていたのだった。

つまり、天上の上空の割れからも、曼荼羅ミセルが、地獄の黒タール層に届いていたのだった。上空からの仄かな曼荼羅ミセル光子と、地か奥深くから探るように昇ってくるそれと、二種類の曼荼羅ミセルで、地獄

の地表は照らされつつあった。しかし、ミセルだけあって、灯りはぼんやりとしていた。しかし、ミセルを覆う耳粒の中は仏芽で出来ていたので、それが地獄を感じて曼荼羅ミセルの表皮を割って、発芽してきた。

生え出してきた仏芽は、地獄の空から降り落ちる僅かなミセルからと、沼底の裂け目の奥深くからと、上下両方から地獄の底を覆っている黒タール層に向けて、触手のように延びていった。そのような仏芽が同時に何百億万も、黒タール層にめがけて延びていった。沼底の罅割れからの仏芽の方が圧倒的に多かったので、黒タール層は沼底から持ち上がった。仏芽の許多の触手に持ち上げられた。そうして、そのまま臭気大気層の上空の、耳粒ミセルで成る沼水の層まで持ち上げられていったのだった。

しかし、黒タール層は、地獄の魂だったので、そのようなおやかさに性懲りも無く発情した。それで、前回と同じ轍を踏んで、黙っておれば持ち上げられて仏芽まみれになってあへあへになれるものを、持ち上げてくれる仏芽を貪り喰らって勃起しだしたのだった。不定形に勃起したので、金平糖のような形になって、幾多の玉に分割されて、黒タール層はまたもやゴム塊と化した。それで、昇天するのを嫌がるような形で、持ち

上げてくれる仏芽を食つては、むらむらとした不快感を悪臭として放ちつつ、苦患大氣層の界面を上上昇させていった。要するに、満たされることのない苦悩の雰囲氣の大氣層を、沼底からどんどん増加させていったのだった。

実を言うと、このときの苦患大氣層は初めの毬藻の壊滅によつて生じた重苦しい苦悩の大氣層よりも、輕かった。何故かと言え、食欲を満たされていたゴム塊の苦悩は、救いようのない欲望を持っていた黒タール質の苦悩よりも、いくらか楽だったからである。なので、最初に仏芽が黒タール質を救うべく突入していった苦患氣泡層よりは、大氣層はまだ仏芽の延びに寛容で、仏芽が苦患によつて壊死することはなかった。そのような理由で、仏芽は金平糖。ニスに貪食されつつも、延びまくっていた。

なので、飽くことを知らぬ金平糖。ニスは、その肉棒をどんどん硬く長く勃起させていったのだった。仏芽は、ここですとう、金平糖。ニスの欲望に気付いた。彼らは、挿入したいのだ、と。しかし、仏芽には穴が無かった。仏芽はそこで、仏芽を絡み合わせて、疑似ヴァギナを作った。そして、金平糖。ニスの全てに、蓋をす

るという暴挙に及んでしまった。

すると、金平糖。ベニスは、とうとうはち切れて、射精してしまった。金平糖。ベニスの精子など高が知れていて、汚らしいものだ。それが、仏芽の疑似ヴァギナの中に、放出されてしまったのだった。金平糖。ベニスは、味を占めて、喰らつては勃起し、勃起しては射精を繰り返した。精子は、金平糖。ベニスがオルガスムスに達したときに放出されるものなので、快感の塊だった。それが苦患大氣の重量を希薄にしていたので、やがて大氣は泡ボコとなって、沼底から水面上昇していつてしまった。すると、金平糖。ベニスは、とうとう仏芽塗れの世界に、放り込まれてしまったのだった。

金平糖。ベニスのエゴイステイックな欲望が、どれだけのものであったか、それはこの世界が物語っているところだろう。とにかく、飽くことなく仏芽を喰らつて勃起し、疑似ヴァギナに挿入しては射精を繰り返した。沼には、かくて、曼荼羅ミセルの外に、金平糖の精子が漂うことになった。欲望のままに挿入していた金平糖。ベニスだったので、ほどなく沼底は金平糖精子塗れになった。精子とは、泳ぐものである。金平糖精子もまた、泳

いだ。しかし、泳ぎ着く先の、卵子が無かった。なぜなら、ヴァギナは急ごしらえの疑似的なものだったからである。

この状況には、仏芽も参った。そこで、仏芽はふと思いついたのだ。如来の玉音に触れさせたら、精子も静まり、金平糖。ニスも乱交を止めてくれるのではないかと。それならば、耳粒の覆いを取りのけて、玉音を一光、降臨させてみてはどうだろうか……。思うと、その通りになってしまう、嘘を付けない真実性を持つ仏芽ゆえに、菩薩として曼荼羅を形成しているのである。ほどなく、玉音が来迎した。つまり、如来様が御来迎なさったのだ。

要するに、耳粒の覆いを除けて、一つの精子を曼荼羅の中に、招き入れてみたのだ。すると、精子は、たちどころに干からびた。玉音とは、真実の言葉と同義であるから、欲望まみれの金平糖。ニスの出す精子は、折伏されるのが関の山なのだった。一法通ずれば万法通ずとはこのことで、沼中の精子は全て、玉音に折伏されて干からびた。金平糖。ニスは、精子ほど感じやすくなかったので、それでもまだ、疑似ヴァギナに挿

入しては射精を繰り返していた。この欲望は、ほぼ際限が無かった。なぜなら、沼底の広さが際限の無い混濁したカオスだったからである。

これを救うには、どうしても「秩序」が必要だった。

六、祈念

沼底がそのような体を為していたときに、如来様はどのようなさつていたのだろうか。

大日島の耳朶華如来は、耳朶華を凜と張り上げて、周囲の大气じゅうに玉音を放散していた。つまり、説法し続けていた。しかし、大气じゅうに沼水たる耳粒が漂っていたので、玉音の光子は、大日島を離れるとすぐ、耳粒とそれから延びる仏芽に取り囲まれて、曼荼羅ミセルと化した。沼上の天上の地は、曼荼羅ミセルで一杯だったのだ。

玉音の光子は、それぞれ様々な色をして、独自のことを語っていた。なので、曼荼羅ミセルもそれぞれ独自な色形をしていた。百千万億の曼荼羅ミセルがあつたが、どれ一つとして同等なものはない。つまり、徧界がすべて独自の個性を主張した、局在性を持つ曼荼羅たちの集まりとして、莊嚴されていたのだつた。

曼荼羅ミセルは、あちらこちらに所在なく万遍なく秩序なく漂っていた。秩序が無かつたが、法則性はあつた。一定の法則性に従つて、曼荼羅は散らばっていた。それは、成るように成るという法則だつた。ものがあつて時間が経過すると、ものは成るべく変化を起す。そのような法則によつて、曼荼羅も散らばるべくして散らばっていた。

沼上の空気は、曼荼羅ミセルの水蒸気が、そのように散らばっていたが、沼水の水面下も、ミセル化していた。空気中の曼荼羅は、シャボン玉のように漂つて浮んでいたが、水面下の曼荼羅は、犇めき合つて流動していた。しかも、届く光子の数が、水面下に行くほど少ないので、仏芽が主導して曼荼羅ミセルは底面に向けて降り落ちていった。そして、ミセル化していない耳粒が、湖面に浮上してきては、光子に触れてミセル化した。

耳粒のミセル化と曼荼羅の沈降を繰り返してはいたが、沼底は際限の無い広さを誇っていたので、耳粒は無限にあつた。なかなか、偏界が曼荼羅で満たされることは無かつたのである。

しかし、際限が無いとは言え、一沼の底辺なのである。上を知れば底の広さも限定されてくる。沼とは、泥水の溜まつた窪みに過ぎないからだ。それを知らしめたのが、上層から降り積もった曼荼羅ミセルだつた。曼荼羅ミセルは、秩序有る天上の大日島から来ているので、世界の縁を知っていた。つまり、大日島の浮ぶ沼の岸を知っていたのだ。

大日島は、確かに特殊な高さを持つてそこだけ浮び上がった孤島だつた。天上の国土に、現在、外に陸地は無かつた。沼の果ては、地獄の裏に通じていて、地獄の裏からまた沼底の果てに続いていたのだ。つまり、沼底の果てと沼面の果ては、空間が捻れて繋がっていたのだ。ただ、一度、地獄の裏面を通っているが為に、曼荼羅ミセルもそこを通つて沼底まで達せずにはいた。それよりも早く、曼荼羅ミセルが沼上から降り積つていた。

天上の縁があつて、そこから先は地獄の裏になっている境界線があつた。それは、フラクタリックに耳の形を

していた。その耳型の境界の天上の地から裏返ると、沼底の裏に平面が続いていた。そして、さらに沼底の裏面の一点に、臍のような穴が空いていて、そこから裏返って地獄の沼底の果てに続いていたのだった。

その天上の境界線の耳型に、曼荼羅ミセルが降り積もって、沼底に秩序を齎したのだ。沼底の形が、曼荼羅ミセルによって区画されたのだ。地獄のペニスは、曼荼羅ミセルが降り積もり、仏芽まみれになるままに、発情勃起射精しまくった。射精された精子は、すぐに玉音に触れて干からびた。しかし、沼底に限界が齎されたことで、干からびた精子が沼底に溜まりだした。干からびた精子は、エゴイズムの塊が腐ったような異臭を発していたが、なぜか空気とは成らずに、ミセルの中を漂った。そして、その異臭がミセルの仏芽に対する金平糖。ペニスの発情に抑制を掛けて、金平糖。ペニスは、とうとう萎えだした。疑似ヴァギナ中で萎えたのだ。そして、オルガスムスに達せなくなり、遂には干からびた精子の腐臭に伸されて、拉げてしまった。かくて、金平糖は、種の無い梅干しのように、しわしわでふにやふにやの残滓と成り果てた。

金平糖。ペニスの残滓としての梅干し残滓は、あちらこちらで力なく沼底に堆積していった。それは、報われ

ない魂として、地獄の底に積るほか無かったのだ。物ごとになるべくして成るという法則性が、曼荼羅ミセルによつて齎された今、地獄の魂は救われようがなかった。エゴイズムの成れの果ては、地獄の澱であつたか！貪り尽くし、自らの欲望の腐臭に毒されて、エゴイズムの魂は遂に地獄の底辺として、層作して堆積しだしたのだつた。

梅干し残滓は、ふにやふにやの体軀を、干からびた精子の中に埋もれさせて、沼底に溜まっていた。その皺の襞の奥まで、腐臭を発している干からびた精子に塗れさせて、エゴイズム梅干しは、無氣力化していった。それは、今までの欲望の激しさが夢幻のように抜け落ちたような、激しい消沈の仕方だつた。無氣力なので、物ごと作されるがままに、ケセラセラと流された。それは、あたかもエゴイズムの消失を示しているようでもあつたが、無氣力な分、エゴイズムが遺っていた。つまり、地獄の魂が救われる道はただ一つ、無我の境地に達すること、それ以外に無かつたのだつた。

その点、いわば義務的にはあるが、救われるためとは言え無我を目指す道が出来た点において、ようや

く地獄の魂にも、仏性と呼べるものが備わりつつあったのかもしれない。地獄層の梅干し残滓層は、腐つても自分のために、それでも無我の境地を目指すという、一種のパラドキシカルな構造を内包して、沈殿していたのだった。そのような概念をすり込ませたのは、なんといつてもやはり玉音の光子であり、干からびた精子の分だけの誨諭が、梅干し残滓の周りを取り囲んでいたのだった。

少し前までは、仏芽塗れでヴァギナに挿入することを欲しいままにしていた金平糖。ニスであつたが、いまや干からびた精子の誨諭塗れになり、萎むと同時に自我から無我への苦しい転換に喘いでいたのだった。

しかし、その苦しみは、一時の餓鬼地獄や性欲地獄と異なり、出口と生長のある苦患だつた。梅干し残滓は、いまや無気力感に浸りつつ、自我の欲望の満たされぬ苦しみを脱することを、一心に願っていた。いや、祈っていたと言っても良からう。それくらい、自我から無我への転換の苦患は計り知れず強く、しかもクリアーだつた。クリアーな苦患なので、こころが一つに纏まり、祈りへと昇華していったのだった。

祈りは、やがて形になって顕現した。降り積もる梅干し残滓の一部がうずたかく盛り上がって、手を合掌

した形になったのだった。積み重なる層としての梅干し残滓が、心身一如を示して、巨大な祈りの合掌形を形作つたのだった。それは、大沼の底に聳える峰となった。巨大な祈りの峰だった。

大日島の耳朵華如来は、そのさまをしつかり俯瞰していた。

七、噴火

合掌の峰は、いよいよ隆起して、大沼の底から大きく聳え立った。それは、エゴイズムの裏返し of 切迫した虚無感による祈念によるものだった。祈りは、しかしながら、なかなか報われなかった。耳朵華如来は、合掌峰にも万遍なく説法的光子を振り撒いてはいたが、それが救済の形として現れるには、あまりにも梅干し残滓のエゴイズムが強すぎた。エゴイズムの強さの分だけ、合掌峰が高く盛り上がった。虚しさに摺り代ったとは言え、それは巨大なエゴイズムだった。祈っても祈っても報われない魂は、その底に虚無感の苦患をドロドロとた

め込んで、今にも爆発しそうだった。そして、その苦しみのパワーを合掌の峰高に顕現させて、いよいよ高く迫り上がっていった。

遂に、合掌の峰頂が湖水面に達した。合掌の峰の人差し指が、水面から顔を出すと、耳粒層が薄く純度の高い曼荼羅ミセルが、じかに梅干し残滓に当たると、こんな状況でも苦しみの奥底から湧き上ってくる浅ましき欲望が、峰底のエゴイズムによる虚無感を、峰の内部から溢れ出させて、遂に爆発したのだった。つまり、湖面上の天国に、虚無感のドロドロの溶岩が、峰の頂上から噴火したのだった。

天国は、大日島と祈念峰の二つの離島が国土となった。大日島からは曼荼羅ミセルが、祈念峰からは虚無感エゴイズムが、それぞれ放散されていた。それらは相混じり合い、曼荼羅ミセルの周りに虚無感が纏わり付く形となって、曼荼羅の層が一つ増えた。つまり、光子、仏芽、耳粒、虚無感の順に、内から外へ層をなして球形の曼荼羅が、形成されたのだった。

噴流は、しばらく公園の噴水の如く、勢い良く迸り出していた。それは、太古から大沼の底に滞留していた

苦患という名のエゴイズムの表出だった。毬藻から黒タール質、ゴム塊、ニス、タール層、金平糖、ニス、梅干し残滓、と栄枯盛衰を繰り返した浅ましき地獄のエゴイズムの、長年蓄積した巨大なフラストレーションの分だけ、噴火物は思う存分放出された。噴出されれば収まるほどの利口さも無いエゴイズム故、噴出されたらされたで、そこでまた性懲りも無く食った。しかし、エゴイズムは今や、無常の煽りを受けて虚無感となっていた。虚無感が曲がりなりにも目指していたのは、無我なの境地なのだった。つまり、噴出されたエゴイズムは、悟りを探し求めて、食りまくったのだった。

何を、食ったのか。天上の地には、いまや曼荼羅と虚空しか無かった。虚空を食っても虚しさはますます募る一方なので、自然、漫然たるエゴイズムは、曼荼羅ミセルを食った。つまり、曼荼羅ミセルの周りに纏わり付いて、同化しようとしたのだった。しかし、どんなに周りに纏わり付いても、耳粒が周りをぎっしり占めていたので、同化できなかった。菩薩道を行く仏芽も、悟りを何か食べ物のように与えることは不可能だったので、このときは硬く耳粒の中に閉じこもっていた。

曼荼羅ミセルは、漂うべくして漂った。もはや、大沼の底には苦患という地獄が無くなつてしまい、それとともに沼水も透き通った。沼底まで、玉音の光子が届くようになった。すると、湖水を作している耳粒が、降り注ぐ光子の周りに吸着して曼荼羅ミセルを形成し、仏芽層が形成された後も曼荼羅の周りから吸収されて、耳粒層に加わつていった。つまり各曼荼羅ミセルの耳粒層の厚さが漸増していった。曼荼羅ミセルは、どぎえもんのように膨れ上がったのだった。

それとともに、限りなくあつた湖水が次第に目減りし初め、耳朵華如来の島が、往古の姿を取り戻していった。つまり、丘と化していった。すると、麓に再び、耳朵華が芽吹き初め、天国らしい耳朵華の風景が戻りつゝあつた。以前と異なるのは、空間に漂うのが光明では無く、肥大した曼荼羅ミセルだということだった。湖面の水面が下がる位なので、塵埃くらいの大きさだった曼荼羅ミセルも、シャボン玉くらいの大きさになつて、漂つていた。その曼荼羅の大きさは、大日の丘から遠ざかるほど大きくなり、近付くほど塵埃の大きさに近付いた。

つまりは、今なお説法し続けている耳朶華如来の、すぐ周りには玉音の光明が漂っているが、丘から降り掛かるとすぐに耳粒を吸収して仏芽を纏ってミセル化し、さらに降りていくと離れたところにある祈念峰からの虚無感が周囲にへばりついて、曼荼羅が完成するのであった。大日の丘のすぐ近くには、一番無垢な耳朶華が咲いていたが、丘を降りるに従い、耳朶華の色がくすんでいき、茎も硬くなつて、丘から大分離れて耳粒の湖に近くなると、木化した耳朶華が、幹を強ばらせて林立して森を作しているという状態に成っていた。

一方の祈念峰の方は、虚無感の漂う土地だったので、耳朶華は一つも咲いていない荒地だった。シャボン玉状の曼荼羅ミセルもあまつさえ大きくなつて、虚無感の層厚を増していた。層厚を増してボーリング玉ぐらいの大きさになった曼荼羅ミセルは、虚無感で鈍色に艶掛かつて重く地面に転がっていた。祈念峰が耳粒湖に接する岸边は、そのようなボーリング玉がごろごろ転がり、内陸に入つて噴煙を上げる頂上に近づくに従つて、そのボーリング玉の直径が大きくなつていった。頂の火口からは、今なお虚しさという名のエゴイズムが噴煙となつて、もうもうと立ち上つてはボーリング玉に降り注いでいた。ボーリング玉は、その煙で燻されるこ

とに艶を増して、巨大化していった。祈念峰の裾野から、次第に号数を増やしたかのように巨大化するボーリング玉は、徐々にそれぞれ煙を吸って重量を増し、犇めき押し合い上層の特大ボーリング玉を押し上げていく結果となった。押し上げられた特大ボーリング玉は、火口の縁を乗り越えて、火口の中に落ち込んでいて文字通り火山に栓をすることになった。地獄のエゴイズムは、また封印されてしまったのだった。

ボーリング玉で封をされても、その隙間から虚無感の噴煙が擦り抜けて上空へ立ち上っていった。そして、祈念峰の裾野のボーリング玉の周りに愈々纏わり付き、ボーリング玉の重量を増した。すると、頂上付近のボーリング玉が重力で裾野へ落ちていき代わりに重量の少ない小さなボーリング玉が押し上げられた。つまり、山裾でボーリング玉の対流が起った。なので、祈念島は海岸縁までボーリング玉で犇めき合い、それらは対流して均一化していった。

しかし、そうしている間も、底知れぬ虚無感が祈念峰の地底奥深くから沸き上がって来ていて、火口に栓をしている特大ボーリング玉群を押し上げつつあった。押し上げつつも、ボーリング玉の核にある玉音光子を

憧憬して、虚無感はボーリング玉に雪だるま式に纏わり付いた。重くなる特大ボーリング玉の重量と湧き上がる虚無感の苦患圧とが、累卵の如く危うい均衡を保っていた。

火口下の虚無感は一切実だったので、擦り抜けて外に出るか、抑えつけている特大ボーリング玉に纏わり付くか、の二者択一だった、しかし、特大ボーリング玉がますます巨大化してエアーズロックぐらいの大きさになってしまふと、栓をされた火口から漏れ出すことは、虚無感がいくら切実でも不可能になってしまった。火口下は、再び地獄と化しつつあった。

火口下は、虚無感の苦患が圧縮されて熱を持ち始めた。暖められても虚無感自体は癒えることはなく、満たされぬエゴイズムの苦しみ、暑苦しさで倍增するだけだった。圧縮熱と虚無感の相乗効果で、苦患は指数関数的に膨張して、再び爆発する様相を見せた。しかし、虚しければ虚しいほど、巨大化するエアーズロックの火山栓は、とても地獄を開放してくれそうになかった。

そして、堪えきれなくなった虚無感の噴煙は、熱爆発を起こすに到ったのだった。

つまり、火山下は大火事になった。

八、劫火

おのおのそれ自身に火が付いて、世界中が燃え尽きる劫火が、火山下で起こると、その熱爆発が祈念峰の下方深くまで染み行つていった。爆発は爆発を呼び、祈念峰の地盤は燃え盛った。祈念峰は、もともと耳粒湖から隆起していた山脈だったので、耳粒湖の沼底にも飛び火した。耳粒湖の沼底は、罅割れがあつて天上の空と繋がつていたので、火種が天上から降り出した。火種とは、虚無感苦患の絶望的極限値であつた。絶望が深すぎて、灼熱化したものだった。それは、ちよつとやそつとの慈悲では、消えない火種だった。それくらいその絶望は、極限的だったのだ。

天上から降り出した絶望の火種は、耳朵華の森や草原に次々と落ち行き、燃え盛った。耳朵華草木は、

あつというまに劫火に包まれた。大日の丘も例外でなく、劫火に包まれた。つまり如来様にも絶望の烈火が焼きつけて、耳朵華を瞬時に炎で包んでしまったのだった。

また、空中に浮かんでゐる許多の曼荼羅ミセルも、玉音のほかは全て劫火の炎に包まれた。耳粒湖の水も、例外なく燃え盛った。世界が絶望の劫火で、爆発的に燃焼してしまったのだった。世界は、絶望の火焰と化した。つまり、世界の終焉である大劫火が現成したのだった。

耳朵華如来は、劫火に焼かれつつ、涼しげに鎮座していた。焼かれても、玉音を発していた。それは、物質と靈性の二面性を現実界に持たせた。物質的には烈火に包まれながらも、同時に、靈性的には經文を説き続けていた。しかし、この靈性を持ち得たのは、如来華とそれから発せられた經文だけだったので、ほかの仏芽、耳粒、虚無感などは、すべて劫火と化して世界を燃やし続けていた。なので、靈性的には、世界は經文に埋め尽くされてしまい、物質的には、全てが烈火で燃え盛ってしまった。すなわち、火焰即經文という大光明に、全世界が包まれたのだった。これは、即ち、世界の終焉だった。終焉とは、全てが宇宙に帰着するこ

とであつたのだ。ここに、密嚴国土が大現成したのだった。

しかし、火焰は極限の絶望の表現でもあつた。この世の中は、絶望に包まれた地獄でありつつ、経文で満たされた天国でもあつたということである。天国でありながら地獄であるという、このパラドキシカルな二面性は、物質と靈性の両極性でもあつた。所詮、物質は滅び行く宿命を備えた無常のものであり、絶望的であつたのに対し、靈性は輝き照らす光明に包まれた恒久のものであり、樂天的だつたのだ。

大劫火は、いつ終るとも知れず烈火を燃やし続けた。世界が恒星と化したかのようにだつた。灼熱地獄であり密嚴国土であつた。しかし、長い時間の後に、やがて恒星が燃え尽きてしまうのと同様、灼熱地獄の劫火も、やがて衰えだした。燃える燃料である仏芽や耳粒、そして虚無感が燃え尽きてきたからだ。それらは、燃えることによって昇天して玉音と灰になった。物質が燃え尽くと、成仏して靈性的な玉音と化したのだ。しかし、人の死体が焼かれても舍利が遺るのと同様、それらの燃えた後に灰が遺つた。物質の舍利だつた。物質界は、遂に、一面の舎利の山と化したのだつた。靈性界は、それに対して、経文の美音の樂を奏でていた。世

界の終焉は、かくもドラマチックであつたか！ 映画の幕が下りるときのように、エンディングテーマたる玉音の樂曲が、美しく煌びやかに、演奏されていたのだった。

ここで、天上の地の裏はどうなつていたか。裏もまた、地の果てから劫火が廻り舍利と化していた。裏から臍に入り込んで沼底の果てに繋がり大沼が出来ていたので、臍から廻つた劫火は、遅まきながら大沼の大地から廻つた火焰と合わさつて大燃焼した。そして、世界の表裏全てを舍利化したのだった。大劫火は、いつ終るともなく永遠に続いていたが、その間中靈性界では、玉音の樂曲が快い背景音として流れ続けていたのだ。

永遠の果てに表裏の全世界が舍利に成ると、舍利はさらさらの砂粒だったので、臍から下に流れ落ちていった。つまり、大沼の底の大地の舍利が、沼底の果てから少しずつ滑り落ちて、世界の裏面の臍の出口に吹き溜まつていったのだ。重力は、世界の裏には働いていなかったのだ、沼底の果てから崩れ落ちていく砂粒が、臍の出口から押し出されていつて、裏面に一つのストウーパを形成した。大沼の底は、果てから勾配が付いて、沼底の中央に行くほど堆くなつていたが、これはピラミッドを形成した。つまり、大沼の底にはピラミッド、世界

の裏にはストウパーが形成されたのだった。

大沼の面積は広大だったので、ピラミッドも巨大でありストウパーも高大だった。臍から押し出された舍利粒が、広大なストウパーを世界の裏から虚空に押し出しつつ花茎として伸張し、大沼には堆く盛り上がり円錐状になった花冠為すピラミッドが形成され、その上の丘に舍利と化した如来様が鎮座している。これは、蓮華座の上の御仏の現成だった。仏の華が、一輪咲いたのだった。

しかし、初めに書いたように、玉音の経文とは、光明であると同時に時間でもあった。つまり、物質界は耳粒が燃え尽きて舍利になっても、まだ無常の真理を聴いていたのだ。舍利にも経文を聴く力があつたのか、経文の楽曲の音声に共鳴して、舍利は振動した。つまり、全物質世界の舍利は、靈性界の玉音の奏樂に共鳴して、徧界一交響曲と化したのだった。その深遠で静謐な調べは、次第に舍利同士を擦り合せて、細粒化させていった。砂だったものが塵と成り埃と成り、舞い上がって虚空に漂った。交響曲と化した徧界は、塵埃の為す雲となった。どこにも偏らず万遍なく散在する塵埃が、音楽に共鳴して、揺動していた。揺動は、互いに

衝突を生じ、新たな世界の形成を予感させていた。

この世に、終りがあるのだろうか？ 全世界に玉音が流れ続ける以上、大日の丘で如来様が説法なさる以上、この世に終りは無いのだった。塵埃の振動から、また時間は新しい歴史を刻み、ただ一回の現在を積み重ねていく。無常とは、終りのないことであつたのだ。

九、エピソード

お釈迦様は、靈鷲山のふもとの沼の前に佇んで、浮ぶ葉っぱの間から延びる花茎に開く、白や朱の蓮華をお見詰めになっていた。しばらく、又手しつつ思惟なさっていたが、やがて、何かを思い付いたように、その睡蓮の花を一輪、お摘みになった。花を摘んだ脚で靈鷲山に戻り、多くの衆生の集まる壇上に上ると、しばらく何も言わず微笑していた。そして、やおら右手を高く上げたかと思うと、先ほど摘んでいらつしやつた蓮の

切り花を、一拈りなさった。

衆生は、訝しげにそれを見詰めていたが、お釈迦様はそれ以上何も仰らないので、次第にざわめきだした。しかし、一人迦葉尊者だけ、それを見てにこりとお釈迦様に負けない微笑を返した。

お釈迦様と迦葉尊者は、そのときしっかりと目線が合っていたのだった。

お釈迦様は、そのあと黙って、堂上からお下がりになった。近付いていつて、迦葉尊者は訊ねた。

「華を拈り手折るは、不殺生なりや否や？」

お釈迦様は、笑顔を湛えたままで、次のように仰った。

「おお、迦葉尊者。罪深き愚拙を叱咤し給え。愚拙は、確かに、一枝の睡蓮を手折り弑しました。愚拙は、ただこの可憐な華の美しさを、衆生と分かち合いたかったのです」

迦葉尊者は、お釈迦様の足許に跪いて礼を取って言った。

「何を仰られますか？　ただ美しさを楽しむだけなら、お摘み取りにならなくても、沼まで衆生をお導

きなればよかつたはず？ 真意は作麼生？」

お釈迦様は、しばらく黙っておいになつたが、一言ぼつりと仰つた。

「貴僧は、どうして先ほど、私の顔を見て微笑んだのですか？」

迦葉尊者は、顔を上げて告げた。

「蓮華すなわち娑婆世界かと」

お釈迦様は、頷きながら仰つた。

「殺生を犯しながら生きていかねば成らないのが生命。それが仏様のお作りになつた娑婆世界なのでしよう。そして、この美しき靈鷲山の自然も、やがて遠き未来の後には、滅び去つて無くなつてしまふ。そう思うと、いかにこの生命が、この世界が、この一瞬が、この一輪が、そして仏様が、貴重な掛け替えのない存在であるかが、判ることでしょう」

迦葉尊者は、少し神妙な表情になつて答えた。

「この世界も、手折られた華のように、何れの日にかは、滅するものかと、御教授戴きました」

お釈迦様は、跪いて迦葉尊者の手を取り、手折った睡蓮華を握らせた。

「滅は一時の位にて、すでに先あり後あり、かるがゆえに、滅即ち不滅という。因果応報生々流転、時間
はただ一度きり、愚拙も貴僧も、ただ一人きり。遍身不均等で一回性の中に生きうる仏様が、時空間の全
てとして、現成なさっている。諸行無常とは、永遠恒久でもあるのです」

華を受け取り、迦葉尊者は、お釈迦様に向かって言った。

「この華は、やがて枯死してしまいますが、それも仏様のたなごころでのことなのです」

「愚拙も、いつの日か、自ら命を絶とうと思ったことがあった。たとえ、そのとき滅していたとしても、仏様
は莊嚴として常にここに鎮座しておられたことでしょう」

お釈迦様は、手を取りながら、迦葉尊者を立ち上がらせた。

「お釈迦様すら、自殺をお考えになったことがあるのですか？」

お釈迦様は、微笑みを湛えて言葉を継いだ。

「愚拙は、じつはこの蓮華を手折ることで、こころが強かに痛みました。蓮華の命を短くしたからです。しかし、この蓮華には、愚拙が神々からお教え戴いた仏様の貴重さを、衆生に伝えるための大役を負ってもらう必要があつた。そうしないと、大衆に問題提起は出来なかつただろうし、迦葉尊者にも、今伝えたことが伝わり得なかつたからです。生死はこれ、仏の御命です。その仏性の美しさと尊さを、貴僧に今、しっかりと伝えたのです。これらのことを、正法眼蔵無上大法というのです」

迦葉尊者は、手折られた睡蓮を手に取りながら、強い陽光に既に萎び掛かっている花卉を見て、言った。

「この娑婆世界の象徴の蓮華を、茶毘に付しましょうか？」

お釈迦様は、微笑んで仰った。

「よく弁えていますね、迦葉尊者。一つの生命が亡くなり逝くのです。菩提を弔いましょう」

そうして、周囲から枯木を拾つてきて焚火を起し、その中に枯れかかつた蓮華をそっと差し入れた。

二人は、合掌瞑目してその火が天に帰るのを見届けた。火は盛夏の午すぎなので、めらめらと勢いよく燃え上がり、蓮華はあつけないほど速く、灰燼と化した。お釈迦様は、その灰を手で掬つて眼に涙なさつた。そして、近くに棒きれで穴を掘ると、その灰燼を埋葬なさつたのだつた。

土を被せて、墓標を建てた。墓標となる棒きれに、お釈迦様は「恁麼」と銘をお打ちになった。

「恁麼とは、この娑婆世界すべてのことですね？」

迦葉尊者は、お釈迦様に問うた。

「迦葉尊者、ストウーパは、なぜ必要なのですか？」

お釈迦様は、棒きれの文字を見詰めて仰つた。

「亡くなった人を偲ぶためでしょうか？」

「死は、仏化の顕現です。生命の霊体が仏化して如来に合一する。それは歡喜すべきことではありませんか？」

「死は、喜ぶべき現象だというのですか？」

「生死は、陰陽のごとく、命の両輪です。生まれ出づるのも死に往くのも、同じく生命の歓喜の歌の一節にすぎないのです。更に言えば、幸も不幸も、善も悪も、喜びも悲しみも、楽しみも苦しみも、すべて生命の歓喜の歌にすぎないのです。それが、この墓標の刻印の意味ですよ」

迦葉尊者は、その衝撃的説法にこころを打たれ、感涙を流しつつお釈迦様に礼拝した。

「おお、お釈迦様、ありがとうございます！ お教え身に染みます！」

お釈迦様は、それでも迦葉尊者の身に御手をお掛けになつて、仰つた。

「迦葉尊者と愚拙との御縁、仏様の一瞬一処の絶妙な彩りには、改めて感嘆せざるを得ません。迦葉尊者、愚拙こそありがとうございます。貴僧にお逢い出来て、本当に愚拙は幸せ者です」

「勿体ない！」

迦葉尊者は、泣いていた。お釈迦様も、貰い泣きなさっていた。

「愚拙は、ただのつまらない国王くずれの浮浪人に過ぎません。気付けば、こんなにも素晴らしい密厳国士が、現成している……。何も、問題は無いのです」

棒きれのストウーパは、二人の前に頼りなげに、昼下がりの短い陰を宿していた。お釈迦様が、そのストウーパに眼をお向けになったとき、蓮華の舍利に冥資されて、世界は棒きれストウーパを莊嚴していた。

〈竟〉

螺旋の拈り

一、春の螺旋

広漠と拡がる大地は、乾いた砂々を風に波打たせ、煌然たる日輪に照りつけられていた。日輪は黄金色の光明をその慈愛と共に遍照し、砂地は石英色に透き通つてその恩恵を常々享受していた。なので、砂々はその熱く射し入る陽光に染められ輝き、感極まっていた。乾燥しきつた石英色の砂漠の大地は、次第にその慈愛に感激し、自らの落涙により潤いを宿していった。一面の砂々が潤つて湿り氣を得たとき、大地は風に靡くことを辞めた。風は渦を巻きながら、時として大地を冷やして沈静化し、虚無的に干上がらせて砂埃として虚空に舞い上がらせるが、その度に再び、黄金色の陽光の射す日輪の情熱に絆されてやがて感情を取

り戻し、寂しさに悲涙を滴らせて、砂粒は透明の雨水と化して石英色の大地に降り戻ってくるのだ。

砂埃が核となった、それら自身の悲涙の粒が、雨滴となって大地に降り注ぎ、たたでさえ地上に積もる潤った砂地には、涙が溜まって透明な湖が出来た。涙湖は、大地の凹みに出来たが、雨水が繁くなり愈々涙の水量が漸増してくると、やがて凹みから溢れ出して、川作して低いところへ流れていった。どこまで流れていくのか、この大地の果てがあるかどうかとも判らぬ故、それは未知だったが、日輪の慈愛の熱さが止まぬ限りは、砂々は感涙を流し続けた。そして、時として風が吹き、大地から砂を虚空に浚い上げては、透明の雨水を降らせていた。

川の流れは、渦を発生させた。渦はぐるぐる回り、しばしば大地に突き刺さった。バネのような螺旋形をして、渦は大地に突き刺さり、大地の中に掘り進んだ。もともと、大地の涙の水の渦なので、突き刺さった螺旋渦は大地に親和性があつた。なので、地中に迎え入れられるが如く、渦流の通路が砂地を掘り進み、大地と渦流の触れ合う部分が凝結してしまった。それは、都合、大地作す砂埃と渦流巻く涙水の化学反応物だと渦流の触れ合う部分が凝結してしまつた。それは、都合、大地作す砂埃と渦流巻く涙水の化学反応物だ

った。それは、砂埃より柔らかくて弾性があり、大地の砂のように風で放散したりしなかった。凝結して一つの固形物として、螺旋形作して大地の下方へ渦流の流れるままに伸びていった。中に、純粋な涙水を通すので、透明なマカロニ状のバネだった。

その螺旋バネマカロニは、川底の到る箇所で、生成した。川底は、やがて、その螺旋マカロニで埋め尽くされた。マカロニの中には、涙川の川水が勢い良く通ったので、渦流が大地の砂々下方に突き刺さっていつては、螺旋マカロニを先端を長くした。これは、川底だけに起こったことだったが、日輪の光明が遍照していたので、大地の至るところ湖と川で埋め尽くされ、やがて川と湖が地表を覆い尽くし、大海になってしまった。涙海だった。海にも川の名残で渦流が残っていたので、涙海底の地表面すべてにマカロニ状バネが形成された。

大地の下層は、日輪の慈愛に触れていなかったで、さらさらの乾いた粒々だった。そこに、上から、感涙の海水が、螺旋マカロニ通して、矢継ぎ早に突き刺さってくるので、砂々と涙水の化学反応がその度に起こり、螺旋マカロニは、下方へ長く伸張していくのだった。

螺旋マカロニの中に通る水は、基本的に、日輪の光明に対する涙海の中の感涙だった。それに対し、大地の底には、その光明が届かず、その慈愛を知らない孤独で冷たい大地の層が存在した。孤独は大地を底冷えする深い群青に変色させていた。大地は、どこまで深く埋まっているのか、その懐の深さを安易には示さなかったが、ある程度、マカロニが螺旋を描いて掘り進んでいくと、粘性の高い湿った群青の泥土の層に突き当たった。泥土は、別のセオリーで湿っていた。有り体に言って、泥土は孤独の悲涙を、枯井戸のように汲み尽くされて固まった層だった。誰も慈愛を注がぬ、孤独で暗澹とした泥土層は、その昔、上部と等しくさらさらの砂々だったが、自らの孤独の涙で、周囲を湿らせて、化学反応を起こして、堅く冷たく凝結してしまったのだ。

その硬く冷たい層に、螺旋マカロニが突き刺さり、中の感涙を通して注いだので、泥土層はしたたか驚いた。異質の液体に、著しい戦慄を覚えた。それは、新たな化学反応の予兆だった。

群青の泥土は、砂が孤独の辛さに圧縮されて、凝結変成して悲涙と共に熔融混合して固化した、泥粘土

だった。そこに、感動に打ち震えた透明な涙水が注いだのである。泥粘土は、その透明な液体を汚すほど、暗い群青色に染め抜かれていた。逆に言えば、透明な感涙に泥土層は洗われた。そして、水を初めて知った魚が、大海に勢い良く泳ぎ込んでいくがごとの勢いで、変成していた泥土は、涙水に溶解して涙水の中に発し放たれていった。マカロニをストローとして、涙海が泥土へ向けて注ぎ落ち、そのストロー自身が泥土を吸い上げているような感じだった。泥土層は、吸い上げられたぶん、下方へ後退して行き、そこに入れ替わるように、螺旋マカロニ層が、堆積していった。そして、泥土はどんどん涙海を汚濁していき、すべての涙海が螺旋マカロニに吸い取られて泥土に注ぎ、もとあつた涙海は螺旋マカロニの層に入れ替わった。しかし、解き放たれた泥土の粒々は、快さを感じつつも同時に戦慄も覚えていたわけで、それによって各々火照って紅く発熱していたので、外側の螺旋マカロニも熱せられた。中の涙水も孤独泥土の粒々に熱せられて、粒の色そのままに紅くグレイションを起した。グレイションして詰まったまま、熱せられた涙水は、膨張して外側の螺旋マカロニに広く伸びるように、圧力を与えた。そして、径も丈も伸びていった螺旋マカロニは、ある程度バネ効果で全長の伸びしろ

を吸収したが、遂にバネの限界が来て、亀裂が一举にランダムに幾箇所にも及んで走り、発熱と相俟って爆発してしまった。まだ、下方に孤独な泥土を底知れず残したまま、螺旋マカロニの伸張は、終ってしまったのだった。

爆発した螺旋マカロニは、短いバネの破片となって、日輪の下に散らかった。それは、孤独な悲涙の紅色ゲルの中味と慈愛の感涙の透明マカロニの外殻からなる、二重螺旋だった。二重螺旋は、冷たい群青色の泥土と暖かい黄金色の日輪の間に、小さな破片の数々として、散らばり落ちたのだった。

螺旋マカロニと涙水ゲルは、一体となってバネなして、しばらくは爆発の余韻で、一定の振幅で振動しつつ、跳ねていた。それは、孤独な泥土のうえて、日輪を下にして、延々と続けられた。スプリング・ダンスといっても良かった。もともと、英語でバネの意味のスプリングという単語には、春という意味をも内包していて、日輪が輝き、時として虚空を乾燥した風が吹き抜けるこの時節は、まさに春と言うに相応しい舞台だった。

「春」という名のバネは、若々しく飛び跳ね廻った。春は、恋愛の季節でもあった。バネバネ同志が、恋愛色

に染まつて飛び跳ね相ぶつかり合っていた。恋愛は、異性を想定している。しかし、このバネバネには、あいにく両分する性が無かった。ただ、長さや巻き具合の相違があるだけだった。少年や少女が、未熟でありながらも恋に恋愛するが如く、春のバネたちは、恋に焦がれた。

ところで、外殻のマカロニは樂觀で出来ていて、内部のゲルは悲觀で出来ていた。これは、成り立ち上、致し方の無いことであつた。春という鬱気の増す季節だつたこともあり、やがて内部のスプリング・ゲルは悲觀 شدした。悲觀とは、破滅の予想である。ことによると、その予想には、破滅願望すら含まれていたかも知れない。長短様々のマカロニの中のゲルは、次第に破滅を恐怖するようになり、紅色が変色して漆のように艶やかなブラック色を呈するようになった。ものごと何でも函蓋合するもので、マカロニは、自身の属性の透明である由から、全ての色素の混合である漆黒を大切に思った。マカロニの持たない特色を、ゲルが持っていたのだ。したがつて、マカロニは、ゲルを漏らすまいと、必死に、上下の口を窄めた。

このように、内部のゲルがますます不安を募らせた。ただでさえ、漫然とした破滅の不安に駆られていた

ものが、マカロニの幽閉に遭つてしまいそうになり、いよいよ破滅の危機感を感じだしたのだった。漆黑ゲルは、必死にマカロニの窄めた端の口から、すり抜けようと伸び始めた。しかし、ゲルは伸びるが弾性的変形しか出来ないで、伸びてもやがてはもとの長さに戻ってしまった。これでは、マカロニの幽閉から逃れられない。漆黑ゲルは焦った。焦燥の冷汗をだらだら垂れ流した。すると、マカロニ内壁と、ゲル外壁の間に、潤滑油的作用をもった冷汗が行き届き始めた。こうなると、鰻のように掴み所がないほど曲折自在のゲルは、やがてマカロニ内壁を滑り登り、窄められたマカロニ端から顔を出すと、ニルニルという音が聞こえてくるかのような滑らかさで、マカロニから脱出することに成功したのだった。

漆黑ゲルは、しかしながら、螺旋マカロニの中でグレイションしたので、デフォルトでは螺旋形をしたバネだった。なので、漆黑ゲルも、外殻マカロニも、双方とも螺旋を描いた短いバネだった。そして、このようなゲルの脱出は、いたるところで、ほぼ共時的にあるいは伝染病のように、瞬く間に全螺旋マカロニを襲ったので、程なく、透明マカロニ螺旋と漆黑ゲル螺旋の二種類のバネが出来ることになった。螺旋の有性化とでもいうべきこ

の事件は、春という時節上、必然的に生起したものだだろう。

二、スプリング・ダンス

恋に憧れていたマカロニやゲル各種のバネバネは、このようないきさつで、まるでそのためにフローチャートを書かれていたかのように、そしてあたかも計画通り順調に進んだかのように、透明のマカロニと漆黒のゲルが接触し始めた。「恋はメランコリー」などと歌われるように悲観的になって、漆黒色が色属性として拭えなくなってしまうゲルとしては、泥粘土時代からなかなか日輪に晒されたことがなかったためか、光明を吸収しやすくてたいそう暑かった。何か、日影が欲しかったのだ。日影としては、透明なマカロニは弱いと考えられがちだが、ゲルがマカロニから脱する以前は、ここまでゲルにとって日輪は暑くなかった。また、他に光明を遮り得そうな何物も、世界に存在していなかった。

また、マカロニとしては、泥土が喜び勇んで涙水の澄榮を汚してその熱で紅くグレイションしたときに伝わってきた、ゲルの快感と戦慄の入り交じったようなスパイシーな味が忘れられなかった。普通、マカロニというのはパスタの一種で、なんらかのソースに混ぜるものだが、それはマカロニ自体がソースのような絶妙な美味に、飢えているからなのだ。この螺旋バネマカロニも、悲しい哉、そのマカロニの本質を脱し得ていなかった。しかし、いまやスパイスを示す紅色を持つ存在が、世界に無かった。ただ、スパイスの変性物はあった。無味なマカロニほど味気ないものは無い。マカロニは、この際何でも良いから味が欲しかった。それで、漆黒の悲観ゲルを欲したのである。

ここに、ゲルとマカロニが惹かれ合う必然性が、下手くそな台本に書いてあるドラマのように、現成したのだった。一旦、折角マカロニの幽閉から逃れたのに、ゲルはまたマカロニを求め始めてしまったのだった。しかし、ゲルにも意地がある。様々な個性を持っている各々のマカロニとゲルだったが、もとのペアに戻ろうとは、ゲルの方が決してしなかった。ゲルは悲観的なので性格が悪く、意地っ張りなのだった。なので、ゲルはもと入っていたマ

カロニとなるべく異なるようなマカロニを選んで、その中に侵入した。つまり、長さも径も異なる、不釣り合いな二重螺旋バネが、あちらこちらで出来たのだった。

中には、細いマカロニに無理矢理侵入しようとして、失敗するゲルもいた。また、太いマカロニに侵入して、だらしくたるんで延びているゲルもあった。そのほか、長すぎて全て入りきらないゲルや、細いゲルが二つ侵入している太いマカロニもあった。しかし、すべてが二重螺旋バネとなって、春の日輪のもと、スプリング・ダンスをしていた。

しかし、春はそう長く続く季節ではなかった。やがて、初夏を迎え、日輪の光明は、黄金色から紅蓮色へ色が変わって、強くなってきたのだ。

強く照り出す初夏の光明は、感涙を流した砂々をすでに全てマカロニ化していたので、スプリング・ダンスをする二重螺旋の隙間を通って、群青の泥粘土層に突き刺さった。泥粘土層は、ゲルの素になった孤独感に満ちた層であるゆえ、大体が性質が頑固でひねくれていた。乾いた砂々のように、素直に光明の法愛を受け取

る性質に欠けていたのだ。そのくせ、干上がるほど孤独な涙を流していたので、光明の明るさが眩しかった。そのうえ初夏に差し掛かった紅蓮色化しつつある日輪の日差しは、群青の泥土にとってはとても痛かった。泥土には、強すぎる愛が痛かったのだ。泥土は、ヒリヒリ火傷を起こして、どす黒く爛れだした。表面がケロイド状に溶融して融け乱れ、凸凹になってしまった。しかも、表層で溶融が起こったので、下層まで光明が届かなかった。どこまでも深い地下は、まだまだ孤独な冥界が続いていたのだ。

しかし、火傷して溶融した泥土は、その痛みを恨みに思い、日輪を呪い始めた。法愛の恩を怨恨の仇で返そうとしたのだ。泥土は、乱れて融けた泥から、怨恨をバネの形に芽生えさせて、ニルニルと上方に延びていったのだ。恋するスプリング・ダンスをする二重螺旋の下から、怨恨の螺旋が伸びて来たのだ。それは、焼けただれた泥土なので、怨念に相応しく、濁った黒色をしていた。しかも、ダンスする二重螺旋と異なり、跳ねるのではなく、日輪を掴んで恨みを晴らそうと、泥土層に根付いたまま、上へ上へと伸張していくのだ。

上空に伸びるほどに、怨念の螺旋は激しい日差しに照らされ、紅蓮の灼熱に晒された。それは、火傷を通り越して黒濁螺旋を溶融させた。黒濁螺旋は、蠟燭のように上の方から滴り落ちて、丈を短くさせ始めた。一方では、泥土表面から常に送り続けられる執念深い怨念によって、上方へ伸び続けた。それは、言うまでもなく、スプリング・ダンスをするバネバネよりも高く虚空に懸かっていた。なので、スプリング・ダンスする上空から、怨念螺旋の溶融した滴が、ぽつらぽつら降り始めたのだった。黒濁した液体は、あちらこちらで伸びている怨恨螺旋の先端から、黒い雨となつて降り出した。その黒い雨滴は、時に焼け爛れた泥土面に還つたが、時にスプリング・ダンスをする螺旋に降り掛かった。

黒濁した雨滴は、スプリング・ダンスをするバネバネに当たり、バネバネを怨恨の情で汚した。躍動してダンスする満場の二重螺旋は、それまで恋愛色に染まつて、歌うように飛び跳ねていたのだが、その恋情に怨恨が混ざりだしたのだ。恋情の怨恨とは、相手に対する過不足に向けられるのが一番シンプルである。しかも、雨滴は二重螺旋の外壁たる透明マカロニに当たつたので、透明マカロニは、は少し濁りだして、中にいる螺旋が

ルに對して、恨みを持つようになったのだ。どうしてもっと大きくて長くないのか、あるいは、どうしてもっと自分にほどよくフィットしないのか……。濁りだしたマカロニは、自分の中の漆黒ゲルに、不満を募らせつつあつた。

それでも、日輪は激しく照りつけた。ますます、泥土層は焼け爛れ、その痛みに怨恨の念を蓄積し、黒濁した怨恨の螺旋蠟燭の手を、日輪に向けて伸ばし行つては、溶融して雨と成つて、スプリング・ダンスする二重螺旋に降り注ぎ、それらを汚した。こうして、春の踊りは終焉を迎え、季節は黒濁の梅雨に向かつたのだ。

三、恐怖の梅雨

此土の梅雨は大粒の黒雨だった。それは、孤独な泥土層の怨恨が溶け出した粘性のある水滴だった。なの

で、ますます二重螺旋の透明なマカロニにへばりついて、マカロニを汚し捲つた。春の踊りをしていた二重螺旋達は、その怨恨により心象が変化し、外壁たるマカロニが内臓たるゲルを忌み嫌いだしたので、ゲルはマカロニの端から絞り出されんばかりに排出されかかった。しかし、漆黒ゲルは、もともと悲観で出来ていたので、マカロニに見放されたら路頭に迷ってしまうし、なによりも自分の相手のマカロニが彼らのすべてだった。それくらい、漆黒ゲルは透明マカロニに恋い焦がれていたので、漆黒ゲルの片想いが始まった。

漆黒ゲルは、螺旋マカロニの欲望を満たそうと、自ら力んで変形し始めた。大きくて長いものは、短く細く縮み、小さくて細いものは、長く太く力んだ。そして、ゲルの収縮拡張によつて、曲がりなりにも螺旋マカロニの欲望は満たされつつあった。

二重螺旋は、すでにダンスを辞めていた。もう春ではないのだ。そう浮かれてばかりもおられない。そんなおり、此土の泥土層が変化を来した。底無き孤独の群青の粘土層を成していたかと思われた、泥粘土だったが、日輪の日差しに焼けただれる黒濁層が、怨恨の螺旋として伸張して解けて黒雨となつて降り落ちると、

また此土の地面に黒雨が溜つてまた焼かれるため、黒い雨水はしばらく怨恨の伸張と溶融の降雨を繰り返して、此土の表層を循環していたが、その黒濁した循環層の更に下の群青の地中が、いよいよ虚無感を感じだして、陰圧を発生しだしたのだ。その陰圧は、上層の黒雨を吸収しだした。群青色の虚無地中は、なんでもいから感情を感じたかったのだ。それがどんなに、汚らしい感情でも、虚無感よりはまじだった。虚無の地中は、怨恨の黒雨をスポンジのように、すっかり吸い込んで、怨恨を真っ青に染めて固化した。冥土の凝固だった。虚無の地中には、黒濁層が塞ぐため、紅蓮の陽光も届かなかったので、怨恨を吸い取るしか、感情を保持する方法がなかったのだった。

上層の怨恨と孤独の合わさった黒濁した地面は、それでも降り注ぐ烈火の如き深紅の陽光に、ますます怨恨の螺旋蠟燭を伸張し、下層の虚無と怨恨の混ざった群青の冥土は、いよいよ吸い込まれる壮絶な怨恨の黒雨に、いっそう虚無の冥土凝固を促進した。その地面上で、春のダンスを止めていたバネバネは、こんどは逃走の跳躍を始めた。地面は陰鬱な気配を発散していたので、それに触れるとマカロニは痛みを感じた。なの

で、それから逃げるように高く跳躍したのだった。もとより二重螺旋はバネだったので、高く飛ぶことは造作なかった。しかし、此土には重力が働いていたので、跳躍するだけでは、やがて地面に落下してきた。落下したらまたその衝撃を利用して、高く飛び上がることを繰り返した。スプリング・ダンスからファイアー・ダンスに変わったのだった。

ファイアー・ダンスは、進歩がなかった。一時の恐怖とそれからの逃避の繰り返し。いくら逃げてもやがて陰鬱な地獄作す此土に落ち行かねばならない二重螺旋。しかし、時間は変化を生じて過ぎるものなのだ。同じことは二度と繰り返されない。つまり、二重螺旋が変化を来し始めた。

二重螺旋のマカロニは、少し怨恨の黒雨に降られて、こころが汚れていた。つまりエゴイスティックになっていた。自分の傷みを回避するために、中の純粋な漆黒ゲルを利用しだしたのだった。具体的には、重力に従って地面に降り立つときに、下のマカロニの口から、ゲルを絞り出して、マカロニの下敷きにしたのだった。ゲルは、マカロニに恋い焦がれていたもので、作されるがままだった。つまり、マカロニを庇って、身を挺して地獄の地面との

間のクッションになった。ゲルは、マカロニの質量と地獄の地面に挟まれて圧縮され、あまつさえ地獄の痛みを激しく感じた。しかし、漆黒ゲルは濁った黒雨に晒されていなかったので、純粹だった。かつて、怨恨の黒雨から、自らを守ってくれたのは誰であつたか？ 他ならぬマカロニではなかったか？ そのように恩を感じて、いまこそ恩を返すときだとばかり、必死で地獄地面の傷みを耐えた。それは、マカロニが構造上、何も考えずに黒雨に降られたのとは異なり、能動的奉仕だった。つまり、ゲルはこのとき菩提心を起したのだった。

菩提心を起すと、そのものは、発菩提心真言を掻き鳴らす。それは、仏性の萌芽の真実の琴音だった。おんぼうじしつたばだはだやみ、というその真言は、菩提心を起したあちこちの漆黒ゲルから、ぼつらぼつら聞こえ出し、多くの唱和になったかと思うと、やがて、此土全土に響く全漆黒ゲルを巻き込んだ大合唱となつて、世界の背景音として掻き鳴らされた。つまり、すべての漆黒ゲルが発菩提心した。したがって、その発菩提心真言の大合唱は、相当の大音響で合唱された。しかも、仏性的音声だったので、世界によく調和して天つ箏曲ぞかばかりか、と言わんばかりの美音が流れ続けた。そのため、地獄面が鎮まって怨念の蠟燭が伸張

できなくなつてしまい、黒濁螺旋蠟燭は、紅蓮の光明にすべて融かし尽くされ、陰圧の強い冥土に吸収されてしまった。しまった。黒濁した雨は、終に悲愴な群青色に染まり、冥土に資したのだった。

ところで、発菩提心真言を掻き鳴らした黒漆ゲルたちは、すべて菩薩と化した。菩薩は、基本衆生に尽くす。衆生に尽くすことで、自分が存在可能な何かである。つまり、衆生に尽くさねば、菩薩は死んでしまうのだ。だから、必ずしもゲルにとつて、マカロニに尽くして地獄の傷みに耐えることが楽しくはないにせよ、生きるにはマカロニに尽くすしか方法がなかったのだ。それは、発菩提心したゲルの宿命だった。逆に言えば、菩薩を生じしめた此土の宿命は、おのずと密厳国土の現成に向かつて行かざるを得ないのだった。

群青に染まつた冥土面と透明掛かつたマカロニ面との間に、漆黒色のゲルの発菩提心した菩薩面が出来てしまった。これは、此土の性質上、いわゆる闡提だった。自分らは、能力的には如来に成道出来るのに、此土の地獄面やマカロニ面を見捨てられないが為に、それらを導いて密厳国土を造り上げるまで、ずっと成道出来ないのだった。闡提とは、仏性を持たない卑しい存在と思われがちだが、仏性を持たない振りをして、冥土

のかたを持つて導いているだけであつて、仏性に満ち溢れているのだつた。

具体的には、虚無感と怨恨の固化した群青色の冥土地面に、ゲルの粘度を低くさせていき、染みこんでいった。そうやって、絶対的孤独を感じて、虚無感と怨恨の塊と化した悪魔のような魂に、共感することから、菩薩ゲルは修行を始めたのだつた。

いっぽう、マカロニは自身の中から、痛みより逃れるために、ゲルを利用しようと絞り出したものの、どうも出してみると逆に、心許なくなつてしまつていた。こころがうら寒い。これは、ゲルを絞り出す途中で、マカロニが気付くことなので、気付いた時点でマカロニはゲルの絞り出しを中止した。マカロニの中に中途半端にゲルが残つてしまつたのだつた。しかし、絞り出されて発菩提心したゲル同様、中に残留したゲルもまた、マカロニの保護により濁つた黒雨を浴びずに済んだことに気付いていた。それは、マカロニに感謝しようという強い意志となつて、マカロニを突き動かした。もともと、マカロニの成り立ちからして、砂々の感涙の流れから出来たものだったので、マカロニはエゴイステックになつてはいたが、日輪に感謝をしていた。ゲルは悲観的な泥土で出来てい

たので、マカロニの空虚さに似たうら寒さが良く判った。マカロニは、悲觀的なゲルなどでは満たされないのだ、本来黄金色だった日輪の光明が必要なのだ、残留ゲルはそうのように考え、意志力を筋力に変え、上から空気を吸って下に吐き出した。そうすることでマカロニの下の方から、空気を吹き出させて、推進力を与えたのだった。

すると、もともとから樂觀的なマカロニは、心身一如と言わんばかりに、割合質量が軽かった所為もあり、ロケットのように尻部分から空気を吐き出して、空に上昇を始めた。しかし、悲しい哉、マカロニは螺旋形をしていた。尻の部分から噴出される空気も、螺旋形に渦巻いた。なので、ぐるぐる回転しながらのまどろこしい上昇だった。しかも、季節がそうさせた現象だったので、マカロニはすべて螺旋回転上昇をして、相ぶつかって跳ね返り合いながら、複雑な動きを示した。そうして、マカロニの駆動部となったゲルは、紅蓮色の日輪を目指してマカロニを上昇させていった。

四、盛夏の雲

日輪は、天空たかく懸かるヌミノースなものであった。それは、慈愛としての光明を遍照していたのだが、菩薩液の染みこみつつある冥土面をも、光明で照らそうとした。そのため、光明の波動力がかなり激しかった。赫々と燃え注ぐ紅蓮の照射だった。それは、螺旋マカロニが一身に受けたら、蒸発してしまうほどの強度だった。そのため、喜び勇んで日輪に向かって飛んでいった、数許多の螺旋マカロニの一部が、すべて蒸発してしまつた。それもまた、マカロニの運命のうちのひとつであつたろう。蒸発したマカロニは、その運命のもとに、霧化して灰色の雲を作した。日輪の下に、灰雲が出来つつあつたのだ。灰雲はあちらこちらでいつも形成しつつあつたが、それは紅蓮の光明が群青の冥土面に届くのを遮った。冥土面は、このとき複雑な動きを示した。素直でない冥土面は、菩薩液に同情されて慰められつつあつたにせよ、光明の照射を恨んでいた。その激しい慈愛が、孤独すぎた冥土面には、辛苦の激痛であつたからである。しかし、灰雲に遮られると今度は灰雲を呪つ

た。慈愛が届かなくなると、冥土面が救われる可能性がなくなるからである。冥土面は、光明を痛がりつつも、照射されようと流動を始めたのだった。灰雲に翳った冥土面が、光明を求めて雪崩れ込んだのだ。その代換えとして、辛がつて油断していた冥土面が、灰雲の陰に押し遣られた。つまり、光明を巡って、冥土面が照射されようと、争いを始めたのだった。しかし、このとき冥土面は腳踏した。光明に当たると痛く、雲に隠れると辛い、そのどちらかの苦痛を耐えずにおかずんば、冥土面は存在を許されなかった。明と暗、どちらの苦患を選ぶべきか、それを各冥土面が、個性的に腳踏したので、冥土面は振動した。複雑に揺れ動いたので、亀裂が走り隆起したり褶曲したり、冥土面が変動を起こしてしまった。それは、地震のような激しい現象となつて、この世界を襲った。しかし、大地震が起きても、マカロニはゲルの駆動により、空に飛んでいったあとだったので、冥土面はせつかくの力学的パワーに実効性を持たせることが出来ずに、ただ虚しく地割れた。泥土面はかくして見掛けも冥土らしい険しい様相を呈することになったのだった。

しかし、冥土面にはいまや、発菩提心した菩薩液が浸透していた。それらは、三摩耶戒真言を掻き鳴らし

ながら、冥土面を宥めた。おん、さんまやさとばん。金言の美声は、冥土の魂の琴糸を爪弾き、子守歌となつて冥土の魂を眠りに誘つた。冥土面は、揺りかごの赤ん坊が泣き止んで眠りに陥つていくように、苦しみを忘れて眠りだした。泥のように眠るとは、このような現象を比喻したものであつたのか、しかし彼らは比喻としてではなく、文字通り泥だつた。冥土の泥は、深い眠りに落ちていった。三摩耶戒真言の子守歌は、その間もずっと、光明が遍照するのと同様、莊嚴に美しい音色で掻き鳴らされ続けた。おん、さんまやさとばん。おん、さんまやさとばん。

眠っていると、泥は光明の痛みを覚え、孤独の辛さを忘れた。その結果、冥土面は固定されて、雲の流動に任せて、孤独になつたり光明に照らされたりした。それは、あたかも麻醉手術を受けている、癌患者のような心持ちだつたであらう。泥眠りした冥土面は、確かに痛みは覚えなかつたかも知れない、しかし、無意識のうちに、激しく精神力を、痛みを耐えるために、消耗して疲れ果てた。紅蓮の光明が当たると、群青の冥土面は怨恨の虚無という心象を、照り焼きにされ炎を上げて燃焼させられた。それは、菩薩液の麻醉が

効いているとは言え、相当の体力の消耗を伴ったのだった。しかし、レーザーメスで、悪性腫瘍を切除するの同様に、その怨恨と虚無のところが持つ群青の色素を炙り焼きにされると、冥土面はたちどころに軽くさらさらの石英色の砂々に恢復したのだった。恢復した砂々は、確かにしばらくは、体力が消耗していて、泥のように横たわるしかなかったが、それはもはや粘性を持たない細粒だったので、菩薩液が浸透して再び湿潤すると、今度は精力を取り戻して、おん、ぼうじしつたばたはだやみ、と囁き始めた。

かくして、地上は、次第に菩提心を発露するもので満たされていった。途中で日輪目指して飛んでいったマカロニ群のほうで、皮肉なことに、菩提心の発露が遅れてしまったのだった。

飛翔マカロニ群は、上空を鳥のように乱舞していた。駆動するエンジンが、菩薩に近いゲルだったため、頑張って虚空に舞い飛び続けたが、やがてそれらは疲れ果ててきた。マカロニの中に残留したゲルは、菩薩に似て菩薩に非ず、限りなく奉仕という苦行を熟す可憐な魂だった。菩薩になったゲルは、奉仕が生きる原動力となった変成物だったため、もはや神性を帯びていて、可憐とは呼ばれない尊い精神性だったが、残留ゲルには、

神性は宿っていなかったのだ。やがて疲れ果てた漆黒の残留ゲルは、推進の呼吸が出来なくなり、筋肉痛のために痙攣して、動かなくなつた。エゴイステイックなマカロニは、それでもなんとか、赤き日輪の光明を我が物にしようと、欲望をますます盛んに燃え上がらせた。

残留ゲルが引き攣つて固化してしまうと、エゴイステイックなマカロニは、宿便を出すか何かのように、人一倍力んで、漆黒ゲルを尻から絞り出した。漆黒ゲルは、空中の螺旋マカロニからぼとぼと、火山灰か何かのように、もとの冥土面に降り落ちていった。しかし、漆黒ゲルは疲労しきつていたので、奉仕をし尽くして、しかも素が悲観から出来た物質だったので、その時中に宿っていた精神は、もはや死滅しようという無私のところだけであつた。それは、大乘仏教的成道に近かつたので、菩薩を越えて如来と化したのだつた。つまり、絞り出された残留漆黒ゲルは、ゲル如来と化したのだつた。

ゲル如来が天上から降ってくる、もと冥土面というのは、すでに灼熱の日輪からの紅蓮の光明によつて、清き菩提心を起こしていたので、漆黒のゲル如来めがけて集まつてきて、その降臨に歓喜した。数許多のゲル

如来の降臨の数だけ、菩薩の地面が盛り上がって、受け皿として石英色の蓮花座を形作った。それはまるで宝石のようにキラキラ輝き、紅蓮の光明にプリズムのように輝いた。かくして、往古の地獄面は、今や石英色の蓮花座が林立する、漆黒ゲル如来の煌びやかな都邑となったのだった。

その動きに取り残されたエゴイステックなマカロニは、螺旋を力ませて、かつての残留ゲルのように駆動させようと、空中を不器用に泳いで、日輪に近付くことを試みた。しかし、所詮、マカロニのやることは世俗的であつた。自らのために行うことは、どうしても限界があるのだつた。しかし、力尽きてゲル如来の都市に落ち行こうとも、穢れと崇さとの間の斥力によつて、何もしくなくても、マカロニは虚空に浮いたままになつた。いまや、マカロニは、地に足も付けず、日輪にも渡れない、中途半端に虚空を漂う風船のように成り果ててしまつたのだつた。

マカロニの運命には二つあつた。一つは蒸発して灰雲化して光明を遮るか、今ひとつは虚空に無力に漂うか。いずれにしても、マカロニの未来は明るくなかつた。しかし、マカロニはもとより樂觀で出来ていたので、軽く

てうきうきと虚空に浮びっぱなしだった。そればかりか、灰雲化マカロニは、光明のエネルギーを溜めて、内に小さな日輪を拵えようと、不敬虔な楽天家のエゴイストでなければ考えつかないような夢物語を思い付いてしまったのだった。即ち、灰雲と化して受けた赤き光明の熱と光を、雲の中に溜めて一つに集めて、核を創り出したのだ。

その灰雲は、あちらこちらの虚空で無数に形成されていた。そして、それらは大日輪に近いが為に、光明の慈悲を受け続けた。その光明の慈悲を、光と熱に変えて、おのおのの灰雲を中空にして、その虚ろな空間の真ん中に、核としての灯火を蓄えたのだった。外側の雲が受けた光明の慈悲を全て、絞り出して雲の中央に集めたので、じきに核の灯火は大きく赤く照り輝く核となった。中に光熱の核をもった灰雲は、その光と熱をエネルギー源にして、あちこちに移動しだした。そして、虚空に無力に漂うマカロニに呼びかけて、もろもろのマカロニ群の灰雲化の推進を図ったのだった。

元来が、楽天家のマカロニ群は、挙って大日輪に上っていき、蒸発雲化しだして、みな近くの核エネルギーを

取り巻いて、雲を巨大化させた。集まった雲々は、強い光明を各々受けて、核に光熱を集中するので、まず核の灯火は巨大化していった。中心に疑似日輪を抱く、核エネルギー巨大雲群が、このようにして大日輪の下に、虚空を埋め尽くしたのだった。

しかし、どこの世界にも落ちこぼれと呼ばれる集合体が存在するものだ。エゴイスティックなマカロニの中にも、それらは存在した。それらは、うまく上空に推進できなかったので、蒸発することも能わず、核の雲に遮られて光明も受けられずに、しかも地上に現成した、曼荼羅と言っても良いくらいの数々の如来と許多の菩薩に莊嚴された世界との間に、畏怖の斥力が作用するために、昏迷の虚空に漂って彷徨うしかなかった。巨大化して天を覆った核雲群は、日輪からの光明を強奪して下界に与えなかったため、いくら樂觀的な気質といえど、大日輪の慈愛を受けられぬ落ちこぼれマカロニ群は、虚無感のなかに干からびてしまった。光明が当たっていないのに干からびるのは、どうも道理に合っていないようにも思えるが、マカロニの浮かんでいる虚空が、真空のようにうつろであったため、樂觀したままマカロニは乾燥して、マカロニの干物ができあがってしまった。

た。それは、一見美味そうにも思えるが、あいにく捕食する主体が存在しなかった。黒漆ゲル如来はそれを憐れんで、石英ゲル菩薩を操って、竹輪のような捕食体に普門示現させた。菩薩竹輪は、干物マカロニを捕食しだした。菩薩は完璧なので、示現している間は、捕食竹輪になりきった。つまり、捕食することしか考えないエゴイストになった。しかも、示現した竹輪は、あちらこちら万遍なく数が多かったので、菩薩であることを忘れたかの如く、我利我欲に燃えて、お互い必死に、干物マカロニを争奪した。

捕食された干物マカロニは、捕食竹輪の中で漆黒の菩薩液に浸り、湿润すると息を吹き返して、螺旋型のエゴイストマカロニとして、復活した。しかし、菩薩液に浸ってしまったが故に漆黒色に染まり、悲観的になって自分の内なる仏性を刺激され、自らのエゴイズムに罪悪感を抱くようになった。われわれは、徒に天空の光明を求めてはいるが、そんなことばかりしているから、この地上にこのような黒漆ゲル如来の都邑が出来上がってしまったのだ。それは、由々しきことではあるまいか？ 遍く大日輪の光明が、地上に遍照していたならば、このような菩薩闡提が産まれずに済んだのではあるまいか？ われわれは、菩薩闡提が存在するから、

やがて光明に救われる余地があるのだ。しかるに、菩薩闡提ときたら、われわれの醜さの所為か、われわれを彼岸に渡さぬ限りは、成仏出来ぬのだ。ああ、なんともあわれな菩薩闡提。われわれの所為で、成仏を妨げられているのだ！

このようにして、漆黒に息を吹き返したエゴマカロニは、罪悪感を持つに到った。そして、捕食竹輪のなかで、懺悔した。つまり、捕食竹輪に降参した。そして、捕食竹輪の腸の中で、消化され吸収され、菩薩竹輪に同化したのだった。つまり、発菩提心したのだった。そのようにして、干物マカロニは、菩薩闡提に資した。

五、核と密厳国土

今や、ゲル如来の都邑には、虚空に捕食竹輪だけが浮ぶことになったが、完璧な菩薩としての捕食竹輪だけに、干物マカロニを残さず全て平らげて同化すると、示現を解いて、ゲル菩薩に戻ったのだった。つまりは、

ゲル如来が蓮花座に載る都邑とマカロニ核雲が大日輪を覆う虚空とが構成する天地が現成したのだった。

それは、一時とは言え、平和な世界だったのかも知れない。大日輪の紅蓮の光明が届かないでも、地上には成道した数々の漆黒色螺旋ゲル如来が、石英色砂状ゲル菩薩の蓮花座の上に莊嚴として存在していた。それらは、かつての大日輪の光明と同様の黄金色の光明を、光背として周囲に遍照していた。その地上には、三摩耶戒真言とゲル如来真言が、静かに厳かに調和して、ときには鳥のさえずる声のように、ときには梢の擦れる音のように、快い交響曲のように、合唱されていた。つまり、実は密厳国土なるものが、すでに地上に出現してしまっていたのだった。そこには、悪と称されうるものが、塵芥ほども存在しなかった。ゲル如来の光明と、ゲル菩薩の奉仕によつて成る、正しい仏国土だったのだ。

一度は、苦しみもがいてささくれ立ってしまった黒濁色の地上が、菩薩液により浄化された後は、乾いた石英色の砂丘と化していて、そのちゲル如来の降臨のために、高坏のように砂丘が盛り上がり、虚空から降り立ったゲル如来の数だけ、石英色の蓮華の花弁の重なりを形成した。そのように蓮花座の上に支持さ

れた漆黒のゲル如来は、往時のスプリングの形に戻つて、黄金色の光背を遍照し、蓮花座や砂丘の石英色を透かしてガラスのように煌めかせた。砂丘は、もはや孤独な苦患が存在していなかった。大日輪の光明よりも、柔らかな光背だったので、砂丘と化した土壌には丁度の恩恵だった。もちろん、恩恵とは過不足のない丁度のものであるのが当然なのだ。

その均衡のとれた、漆黒ゲル如来密厳国土は、永遠のときを刻んだ。漆黒ゲル如来は、永遠だったからだ。如来は、しかしながら、その性質上、仏性を持たねばならなかった。仏性とは、時の流れを聞き入れる性質を持つものだ。つまり、やがて密厳国土は、朽ち果てぬる運命にあった。永遠の時間、平和が続いた。峻厳で緊張感が張り詰めた峰々の林立するような、風光明媚な石英色の砂丘から成る蓮花座の数々と、それらによつて荘嚴された座上の崇高で慈愛に満ちていて美しさすら感じさせる、漆黒色の螺旋ゲル如来。やわらかな黄金色の光背が、蓮花座やそれらを支える砂丘を七色に輝かせて、その螺旋ゲル如来は、永遠の時間だけ、密厳国土という平和を保った。しかし、その時間は永遠以上ではなかった。

大日輪の激烈な光明を吸収して、虚空の核雲はどんどん肥大していった。そして、光明を吸収し各々巨大化した光熱核が、いつしかマカロニ蒸気の遮蔽能力を超越しだしたのだった。核雲は、核の光熱により、蒸気からさらに靈気へと相転移を起し、透明になってしまったのだった。マカロニ蒸気は、つまりは亡霊と化した。そして、虚空を恨めしげに漂うことになってしまったのだった。こうなると、雲の中央に隠されていた核の光熱が、直に地上の密厳国土に降り注ぐことになり、核エネルギーが、如来や菩薩を照り付け始めた。もとより成道している如来は、大火が生じた時ですら、涅槃の世界に住んでいるものになるので、また、菩薩も奉仕するしか能のない非エゴイズムの存在だったので、あっさりと核の爆発的照射エネルギーに焼き焦がされて、緋色の烈火が地上を網羅して、世界の終焉の劫火が生起してしまったのだった。

密厳国土すら焼き殺してしまう核のエネルギーとは、何のことであつたか？ それは、つまりはマカロニのエゴイズムが創り出し、マカロニのエゴイズムすら統御できなくなった、光明の化け物だった。それは、マカロニのエゴイズムが光明から抽出して集めて雲の中空に集めたものだったので、もはや光明本来の慈愛が抜け出てしま

つていた。ただの光熱だった。それは、もはやエネルギーの塊に過ぎず、あらゆるものを破壊するだけの殺戮者だった。

巨大な核エネルギーは大日輪の下にあつて、数もかなり多かったので、直に密厳国土を焼き尽くした。漆黒のゲル如来は、真つ先に緋色の照射に溶け出して砂丘の蓮花座に流れ込み、その液体を染みこませた菩薩砂丘も、烈火の燃焼については溶融した。漆黒の如来液と透明の菩薩液が化学反応を起こして、緋色の熱を混じらせて、褐色の中間体成る如菩薩を作り出した。如菩薩は、菩薩のようである如来のようである、要するに悟り得ない悟り人のような、闡提として衆生を彼岸に渡すつもりでありつつも、すでに成道しているような、中途半端な存在だった。それは、却って成道の永久に出来ぬ地獄の物質だった。砂丘の蓮花座の上から、その褐色の如菩薩液が拡散していき、また砂丘は核の熱射によつて透明に液化化していたが、その砂丘菩薩液に褐色の如菩薩液が拡散していき、救われないえせ成道物質は、砂丘の液化化したクリアーな大海に、褐色の澱として対流して、いつまでも残留し続けた。

それでも、緋色の核のエネルギーは、照射し続けた。それは、徐々に砂丘菩薩の溶融海を、蒸発させ始めた。クリアーな大海から菩薩液と如菩薩液が蒸発して、虚空に煙作して立ち上っていった。それは、歴史がしばしばマンネリズムの如く繰り返されるかのように、また灰雲を作して数々の光熱核の下に溜まって、地上を遮蔽し始めた。このとき、相転移していた靈氣のマカロニは、灰雲にすがって背後靈のように取り憑いた。菩薩液の相転移した氣體に取り憑いたマカロニは、菩薩に供養されて鎮魂の祈りを受け出したが、中には如菩薩液の氣體が混じっていた。如菩薩液は、えせ悟りをしていたので、修行の精神に欠けていた。如来も菩薩も尊いもので、それらが相混じったものも尊いものと思われがちだが、何事も中途半端はいけないのだ。奉仕し尽くした結果として成道して如来になるから尊いのであって、如来と化合した菩薩ほど、厄介なものではなかった。奉仕も中途半端で、説法も中途半端で、いわば知ったかぶりの悟り人であった。そんなものにも、マカロニの靈は、分別なく取り憑いたので、マカロニ靈の中に、不平等が生まれた。供養されるマカロニ靈と、えせ教祖に説法を受けるマカロニ靈に別れたのだった。

供養されたマカロニ霊は、やがて成仏してプルシャに帰した。それを見届けた菩薩気体も、救われぬ魂を彼岸に渡し終えた功德により、無に帰した。つまり、マカロニ霊と菩薩気体は、化合して虚空に帰したのだった。膨大な数のマカロニ亡霊が、大海を作っていた菩薩気体と化合して、プルシャに帰したのだった。そのとき、成仏エネルギーが発散された。成仏エネルギーとは、芳香のことだった。それは、線香のような芳しさだった。虚空に、芳香が充満しつづつあった。

一方、えせ教祖に説法を受けたマカロニ亡霊たちは、えせ悟りをして邪な仏もどきになった。邪な仏もどきとは、仏性の狂った憐れな亡霊のことだった。エゴイズムを捨てきれず、自己顕示欲と権勢欲などに突き動かされ、おのおのえせ成道しようと、それぞれ異なったマントラを唱え始めた。我こそは、真実の悟り者に解脱しようぞと、口々にみなえせ真言を唱えるので、世界は俄喧しくなった。いつとき、発菩提心真言や普賢菩薩真言が合唱されたときは、あんなにも荘厳な美しいコーラスが奏でられていたのに、現在のえせ真言は、それぞれが雑音であり、互いに不協和だったので、空爆を受けて応戦をする陸上基地の戦場のように、やた

ら喧しかった。

世界は、なので、崇高な芳香に覆われて無粋な雑音に劈かれつつ、核エネルギーの烈火のような緋色の光熱に照射されていた。しかも、核の烈火は、その遥か上空に、大日輪を戴いていたのだった。

六、永劫法国

えせ教祖たる如菩薩液は、核エネルギーの激烈な照射のため、やがて気体から霊体に相転移した。そして亡霊のえせ教祖となつて、邪な仏もどきを率いてえせ曼荼羅を形成し、芳香を帯びた虚空を彷徨い漂った。虚空とはプルシャであり、プルシャとは如来のフラクタルであつた。如来のフラクタルとは、華嚴經に述べられているような、一埃一塵の中における許多の曼荼羅世界すなわち如来のことであり、虚空はその一虚空のなかに、フラクタル的に五百万億の如来たる虚空を莊嚴していた。それは、芳香というエーテル状の光背のよう

な恩恵を放った。虚空の芳香は、プルシャの功德の現成なのだった。

その如来の莊嚴された虚空を、えせ曼荼羅は彷徨った。それは、邪でちよつとやそつとでは救われようのない悪玉だった。その悪玉えせ曼荼羅とは、核エネルギーの犠牲者なのだった。核エネルギーが、ゲル如来を灼熱して液化化させ、ゲル菩薩の熔融液と混合させたために生じた、不自然な超常的産物だった。ゲル如来を液化化させるなど、天上の大日輪からの慈愛の籠もった光明には出来ないことなのだ。光明から光熱だけを取り出して、蓄積して爆発的エネルギーに変換させた、マカロニ雲のがめつい独占的エゴイズムこそが、この核エネルギーを産み出した根本的原因であつた。

なので、えせ曼荼羅はエゴイズムに汚れていた。そして、その狂った仏性の発現として、狂った真言をおのの千口万舌の態を作して、唱えていたのだつた。それは、いよいよ激しくいよいよけたたましくなった。虚空とは、如来が莊嚴されているものであつたために、慈悲を垂れるものであつたのだが、その恩恵は悲しい哉、狂ったえせ曼荼羅には感受されにくい、嗅覚的な産物の芳香として発現していたからだつた。狂ったえせ曼荼羅

が、恩恵を受けるためには、音を遮る香りが必要だった。それには、芳香の相転移が必要とされた。芳香は、しかしながら、気体や液体などの物質では無かった。前述のように、エーテル的光背だったのだ。光背を相転移させるといような神通力は、世が世である限り、誰も持つことが許されていないのだ。仏もどきは、がなり声を荒げて、我の張った狂気真言を絶叫し続けるしか、もはや存在の時間の流しようがなかった。存在とは、仏性を持つ限り、時の流れの恩恵を受けられるものである。もし、仏性を放棄して、狂氣的幻像を實體化しようとしたとして、その実体に時の流れを摺り抜けさせるのは、もはや救いようなない脱如来のえせ存在である。えせ存在とは、数学では虚数として現されるが、通常の宇宙空間では、それは実体化できない。しかし、高まり続ける音量のとなり狂気真言の所為で、プルシャ空間にひずみが生じてしまった。そのひずみが、狂気の大音量の真言に、とうとう参ってしまつて、ただの僅少な塵一つではあつたが、仏性が壊れた。そのえせ存在塵の出現により、全虚空の如来は、菩薩に引き戻された。つまり、プルシャが汚れてしまったのだ。これは芳香の消失を意味したが、この全世界の記憶に、「芳香」という概念を残したことは確かだった。

尽十方界が虚空から中空に変わり、時間の静止が、一塵から波紋を呼ぶように、同心円状に拡散していつて、それはがらんだりの黒い塊として、かつての如来であった中空に衝突したのだった。如来だった中空は、「一切衆生悉有仏性」の道得を破砕されて、あたかも悲嘆に暮れているかのような「露けさ」を帯びて、上空に大日輪を懸けていた。しかし、もと如来だった菩薩は、実は菩薩になっても如来であることには代わりは無かった。あまり知られていないことだが、如来は垂迹するので普門示現に似たことも出来るのだった。つまり、全虚空の如来は、菩薩に普門示現したのだった。それは、「菩薩の如き」なので如菩薩に似ていた。しかし、如来の垂迹したものではなかった。

大日輪の光明は、その菩薩の如き如来に降り注ぎ、垂迹した中空の露けさを増した。露けさとは、悲しみであり喜びあり、つまりは感涙であった。中空は、大日輪の慈愛により、かつての大地のように泣いた。中空が湿り気を帯びたのだ。その涙は紫色を呈していた。紫色の湿り気は、いまだに赫々と照りつける核エネルギーの光熱を、慈悲の紫雲に成って覆った。以前覆っていたマカロニ雲と異なり、今度は菩薩雲だった。菩薩

は、慈悲深く衆生に尽くすものと相場が決まっている。この場合、救われぬ衆生とは、すなわち赫々たる光熱核だった。そのエネルギーの化け物に対して、菩薩は身を挺しつつ降り注ぎ、エネルギーを次第に奪っていった。つまり、紫雲の露は、紫色の甘露として緋色の核に降り注いで、菩薩として蒸発して成仏しつつ、気化熱を奪って光熱を冷やしていったのだった。核エネルギーも、多くの光熱を集めたものだったので、集合体だった。菩薩の一甘露は、緋色の一光熱を冷却しエネルギーを没収することで死滅成仏させた功德で、プルシャに帰したのだった。中空は即ち如来の垂迹した菩薩だったので、空間中の感涙が紫雲となり、甘露としてすべての核に降り注ぎ、次第にしかし確実に、核エネルギーは冷えていった。

そのとき、如菩薩が相転移した仏もどきを率いるえせ教祖たちはどうしていたか？ 仏もどきに取り憑いてえせ真言をがならせることに、いい加減疲れてきていたのだが、エゴイスティックな魂の性として、競争原理が働いていた。それぞれのえせ教祖は、いまやあたかも大日如来の不在になっているかのような菩薩界において、如来の再来になろうと躍起に説法しまくった。それは、報われない魂と成りいき、えせ説法は次第に怨

恨の叫びに代わつて言った。怨恨の叫びは、ただの激しい罵り合いとなり、大音声で雑音たる罵詈雑言が飛び交つた。しかも、えせ教祖自身は悟り人の魂としての自惚れがあつたので、ほかのえせ教祖やそれらを取り巻く仏もどきを折伏しようと一生懸命だつた。その折伏舌戦が、大騒音として世界に鳴り響いた。

その一方で、如来の垂迹した菩薩空間に、楯突いた静止時間の黒塊が、あちこちでぶよぶよと肥大しつつあつた。この黒塊は、仏性が壊れて時間が静止していたので、地獄の苦しみを湛えていた。時間が止まるというのは、時空間に穴が空くことであり、一見大日如来の天敵ができたような形になつていた。それは、ブラックホールのような強い陰圧を持つ黒い永続的な塊であり、仏性を破壊していく伝染力を持つていた。黒塊に触れる周りの中空は、プルシャが汚されるままになり、低級な吾我が植え付けられ、永続的なエゴイズムを帯び始めた。それだけであれば、エゴイズムの対象になるものが何も無い真空なので大した変化はなかつたのかも知れない。しかし、彷徨するえせ教祖たちが、黒塊の陰圧により惹き付けられ、その中取り込められるやいなや、それぞれのえせ教祖の欲望が貪りだして、えせ教祖下の仏もどき各々自身の恒久的持続を求め

始めた。それは、時間の制止たる非仏性性の獲得を促進させ、各々の独占欲を煽った。多くの黒塊に取り憑くことで、えせ教祖とそれに従う仏もどきは永続できる時間がより長くなるのだった。つまり、えせ教祖たちの間で、黒塊の奪取戦が繰り広げられ始めた。

奪取戦とは、呪術と折伏の合戦だった。呪いながら説き伏せ合うことを、各々のえせ教祖が、躍起になって激突しつつ強行した。激しくて複雑な天地の引き裂かれんばかりの轟音が、何度も何度も爆音の如くけたましく炸裂し、その轟音は何万年続くかと思われるほど、地獄の時間を黒塊空間の内側に流した。つまり、奪取線を繰り広げるえせ教祖たちにすれば、永劫の時間が流れていた。しかし、それは主観的に永劫であつて、仏性を排した黒塊を手にした分だけ時間が止まっていた。つまり、黒塊が奪取し尽くされて無くなるまで、えせ教祖は永劫の時間を戦ったが、外のもとプルシャだった中空空間では、それはほぼ一瞬の轟音でしかなかったのだった。

その永劫の一瞬ののち、最後に勝ち残った強固なえせ教祖が、とうとう全黒塊と非仏性性を手に入れ

て、時間をたとえ一時ではあつても、静止させて永劫の時間を得ることに成功した。それは、「一切衆生悉有仏性」の道得を破壊した、如来という有に対するクーデターだった。有に対するクーデターだったので、そのえせ教祖は、非有になった。非有とは無とは異なるのであつた。なぜなら、有ではないが存在はしているのであるから。

その闇の永劫法国を築いたえせ教祖は、中空に懸かる大日輪を手に入れることを欲望し始めた。宇宙をこの手に入れた気になったえせ教祖非如来は、大日輪の慈悲を覆し、その絶大なるエネルギーそのものを欲したのだつた。全ての中空に降り注ぐ光明の、見かけ上の中心体である大日輪。それは、えせ教祖非如来には、とても魅惑的に映る、喉から手が出るほど欲しい、狂おしいほどの欲望の対象だつたのだ。

しかし、大日輪の光明は、光であり熱であつた。それは、時間の流れる世界にしか、影響を及ぼすことのできぬ恩恵であつた。時間を止めた永劫法国には、「世界」が「界世」になつても、届かない代物であつた。

なので、非有なる非如来は、実は如来の光明を受けられなかった。こんな地獄が、浮世に現成していいもの

か、と古の聖人達は言うだろう。しかし、それは現成しているのではなかった。すくなくとも、有りもしなかったし無いわけでもなかった。これは、往古の数学者が発見した虚数などという概念よりも遙かに、有り得ない数値で表される、非合理的存在だった。曲がりなりにも、それは存在なのだった。仏性を持たないというのは、如来の道得が一見覆されたようであり、却ってその確実性を裏付けした事実でもあった。「一切」の「衆生」が「悉有」であるのが「仏性」だったのだ。つまり、その非合理的存在は、「衆生」ではなかったのだ。

如来の言う「衆生」とは、有情であり無情であり、この世の有全てであり、「一切空相」の「一切」であり「空相」のことである。つまり、「空相」でもなく「一切」でもない存在が、浮世に出現してしまつたのだ。それは、かろうじて非合理的存在として、有りも無くもせず、漂つていた。数学でいえば、非合理関数とでもいう存在だった。つまり、数字でないものを表す関数だった。それは、視覚的でも聴覚的でもなく、実体があるのでも無いのでもなかった。小説のレトリック上の産物でしかないのではなく、実際に、非有非無の非合理的存在なのだった。なので、形容しがたかった。見えもしなければ聞こえもしない、実体がないわけでもないの

るわけでもないからだ。しかし、それは存在していた。しかも、永劫の時間を、時流を止める中に、築き上げていた。

それは、救われがたい地獄であつた。この地獄を救うためには、如来は別の方法を考えねばならなかつた。如来にしてみれば、そのようなあるかないか判らぬ小非如来など、放っておいても何の損にもならないのだが、慈悲深いのが如来の属性なので、どうしても救いの手を差し伸べずにはおられないのだつた。

しかし、当の非如来としてみれば、少しも自分が地獄だという自覚がなかつた。永劫の時間を、時流を止めることで得た皮肉的存在は、自らの存在の尊厳を、えせ真言として、声高にそして誇らしげに、絶叫していた。それは、仏もどきの教祖である非如来の独唱とも言えたが、如来的立場からすれば、とても聴くに堪えぬ騒音だつた。しかし、非如来からすれば、それは生命の雄叫びであり、非如来の存在根源から滾々と湧き上がる、欲望という名の噴流だつた。それは、エゴイズムの体現であり、非如来は、永劫の時間を、みずからの欲しいままにし、欲望の限りを爆発させていた。非如来の欲望とは何であつたか？ それは、かつての如菩

薩の遺伝子が語るように、螺旋ゲルの欲望だった。非如来の素は仏性の崩壊であり、それは、如菩薩の相転移した霊体が、マカロニ亡霊を説法して、えせ真言を口々に各々がなり立て出した結果として起こったことだったのだ。そのえせ真言の説法には、自然、如菩薩どものエゴ真理が、色濃く滲み込んでいたのだった。

つまり、その欲望は、かつてゲルが群青の冥土の土壌だった頃の絶望的な孤独の記憶を蔵していて、この期に及んで、黄金の光明を欲していたのだった。つまり、非如来はいまや紅蓮になった大日輪の周りに取り付き、雲のように纏わり付いたのだった。それは、狂った悟境の体現としての毒々しい桃色をしていた。

七、聖マカロニの拈り

非如来は、非有非無だったので、実体のある大日輪には、直接的影響はなかったのだが、なにしろ、非如来は呪術と祈念の塊だったので、魔術的神通力で、少しずつ大日輪の光明を、その毒桃色の雲の中に吸収しつ

つあつた。大日輪は、虚空如来の象徴的存在でもあり、じつは虚空如来が現成する以前から、エーテルの芳香を発していたのだが、非如来は、その光明の本質とも言える芳香を捉えられずして、形骸的な光熱だけを取り込んだ。それは、飽きもせずマンネリズムの歴史が繰り返されて、かつてマカロニ雲が大日輪から、光熱だけを抽出してため込んだときと同じように、非如来の雲の中に、非有非無の光熱だけが蓄えられていった。

非如来は、その光熱を得意げにため込み、内包することで充実感を得た。しかし、欲望の塊なので飽くことを知らなかった。いくら巨大化しても飽くことを知らず、いよいよ勢いを増して非如来はより多くの光熱を内に溜め込んだのだった。もちろん、非如来も非有非無的存在だったため、溜め込まれた非有非無の光熱を伴って、黒塊に蔓延った非如来の銀河が、菩薩に垂迹した如来の浮世と、両立したのだった。

しかし、如来にしてみれば、非如来は時空の一断面に拡がった、薄っぺらい存在だった。時流を止めた瞬間に現成している、刹那の樂園だった。それは地獄と同意義の銀河だった。なぜなら、刹那の樂園は、おのずとして刹那主義で出来ていたからだった。刹那主義は欲望を貪るものなのだ。刹那主義の非如来は、内に非有

非無の光熱を爆発的に溜め込んだが、飽くことを知らぬが故に、極限がなかった。つまり、刹那の大日輪の非有非無的光熱を、食い尽くしてしまった。それは刹那のことではあったが、大日輪の全ての非有非無的光熱は、すべて奪われてしまったのだった。

非有非無の光熱とは何であつたか？ 熱とは、時流によつて、物質がエントロピーに従つて拡散していくものであるから、その時流を止めて得られる光熱は、非熱だつた。熱に似て熱に非ず。それは熱の形をした虚妄だつた。つまりは幻だつた。非有非無の非如来の得た明るき光明とは、つまりは絵に描いた餅でしかなく、全てが幻だつたのだ。つまり、非如来とは幻覺をみた如来とでも言うべき、病的存在だつたのだ。

病的であるがゆえに、却つて始末が付かなかつた。無限の非熱の光熱を貪り尽くしてさえ、まだ飽くことを知らぬ非如来は、刹那から飛び出そうと藻掻いた。もちろん、非有非無なので、手段は呪術と祈念しかなかつた。それは、非有非無であるがゆえに、一旦呪術が通ると、爆発的に増殖した。つまり、遂に強いエゴイスティックな欲望で通された呪術が、刹那を破つて次の刹那に浸透していった。その刹那でまた同じく、その刹

那の如來の光明の物質的側面たる光熱の、さらに非有非無的非熱を蓄積して食い尽くし、爆發した。そして、またその欲望の爆發を次の刹那へと順次広げていったのだった。

如來世界は測り知れない。その刹那空間の枚数は無限無際といった言葉で表されるほど簡単に把握が可能な量ではなかった。文字通り、この病的エゴイズムの嵌まった沼は底なしだった。求めても求めても、決して足ることを得ず、終わることを知らず、ひたすらに虚妄の光熱を貪り尽くさねばならぬ非如來。それは決して実感できることのない非有非無的存在なのに、である。非有非無とは、実感はおろか想定すらもできない、あるのでもないのでもない、そんな存在だったからだ。

それは、如來の数那由多倍の膨大さを持っていた。なぜなら、認識できない存在だからである。非有非無とは、あるかないか判らぬ存在であり、いくらでも存在し得たのだった。その幻のような白昼夢のような認識できぬ何者かの中に、そのエゴイズムは足を踏み入れてしまったのだった。それは、いわば収束なき餓鬼道であった。求めても求めても足ることを知らぬ終わりなき欲。それは、地獄以外の何物でもなかったのだ。

この非有非無の非如来が、爆発的に拡大したのは、華嚴經の示すように、如来の世界がフラクタルで、一挨一塵の中にまで、五百万億の仏国土を莊嚴していたからでもある。如来がフラクタルと言うことは、非如来もフラクタルであり、一非如来の中に、認識しようとしても氣を失う数の非如来が存在しているということである。さらにそのうえ、悪いことに非有非無的存在とは、いかようにでもなるある種の自由度を持つ厄介な代物だったのだ。如来は、しばしば時空の塊として説明すると簡素化できるが、その如来の時間軸における一断面に拡がった非如来を、時間軸で積分した量の非如来が、一つのあり方としての非如来だったのに、如来に非ずんば、作麼生かあり得ん、という有様だったので、非如来は作麼生としてあつて、有り得ない分、幾通りにでも爆発的有り様を呈していたのだった。つまりは、一つの有り様の非如来に一々、一挨一塵にフラクタル的に五百万億のえせ仏国土が莊嚴されていたので、非如来は爆発的に拡大したというわけである。

この地獄の慳貪は、如来が救わねば、誰も救う者がいなかった。あいにく、如来は垂迹するという本質を持っていた。しかし、光明が非如来とは異次元で、とても届きようがなかったので、さすがの如来も、垂迹す

るには一拈りする必要があつた。

実は、この一拈りは、「拈華微笑」という故事にあるように、すでに人間に垂迹した如来が、遙けき太古に、靈鷲山で行つていたことであつた。その拈りが今に空間に記憶されて伝わつて、生命の源であるDNAを彷彿とさせる形の、螺旋ゲルや螺旋マカロニを作つていたと言つたら、こじつけが過ぎるとクレームが来るだろうか？　しかし、時として、小説は現実よりも奇なのである。

何が言いたいか、つまりは、一拈りは、すでに如来の形であつたのだ。それが、人間に垂迹したお釈迦様によつて、現成していたのだつた。如来は、一拈りするものなのだ。だから、いづれ拈りによつて、非如来と如来の関係も、拈られて微笑に変わるものなのだ。それは、バネのような如来のしなやかさを示すものであり、如来の本来の姿が、螺旋のように拈られたものであること、そして、非如来もいづれ、如来にしてみれば、拈られる華に過ぎないことを、如実に示していたのだつた。

そういうわけで、無数の作麼生非如来の同時存在が、一刹那非如来の各一塵一埃の中の仏国土について、

存在を拡大していったが為に、非如来は如来の無数阿庾多那数のバリエーションを呈してしまった。これでは、何がこの世か判らない。ただ現実という名のこの世が如来と言うだけであって、現実でないこの世すべてが非如来という形で、現実を妄想の如く覆った。

如来は、非如来を拈るために、大層苦心した。如来は、拈られて菩薩化していたので、現世の曼荼羅は、非如来が「菩薩の如く如来」を取り巻く、含非有非無界多重曼荼羅とでもいふべき複雑さを示していた。如来は紅蓮の光明を発して、それを毒桃色の非如来が、幻の雲の如く、覆っていたのだった。

このとき如来世界は、金剛界と胎藏界の両界曼荼羅から、各如来が脱落して、一見菩薩に垂迹した姿となっていたので、それを模して非有非無両界曼荼羅も、非如来が変化して如菩薩に成り代わった曼荼羅を織り成していた。その地獄絵とでもいふべき非有非無界両界曼荼羅を救うために、一人の聖マカロニが降臨した。聖マカロニとは、如来の拈りを内包した聖のことである。それは、非有非無界と如来界との間に、なぜか蓮の茎の性状を作して、身を挺して架け橋を作った。聖マカロニは拈りが利いた蓮茎色の螺旋の姿だったが、そ

の片方の端を非如来界に、もう片方の端を如来界に掛けて、相反する両曼荼羅世界をつなぎ止めたのだつた。

聖マカロニは、マカロニの性質上、スパイシーな味を求めた。聖マカロニは、大変慈悲深かったので、毒桃色の非有非無界両界曼荼羅の雲に、スパイスを見出して吸収した。みずから毒桃色に染まり、独特のスパイスに味付けられると、螺旋状のスプリングだった聖マカロニは、それらを中に潜らせて、サマーにした。つまり、「春」という季節を「通過させる」ことにより、サマーにしたのだ。これは、日本語の目的語の省略という曖昧さによって両義性を持たせて成立する苦し紛れのジョークでもあったが、そうでもないかと、非有非無界曼荼羅世界は救いようがなかった。つまり、サマーには、壮年期というか黄金期といった意味があり、そのこじつけがましい縁語から、聖マカロニは、非有非無両界曼荼羅世界の諸仏もどきを、黄金色に染めた。また、いやしくも蓮の茎状だったので、泥沼の中に着花させるという性質を併せ持っていて、この場合の泥沼は言うまでもなく、非有非無界両界曼荼羅世界なので、そこから栄養たる毒桃スパイスを吸収して、消化して蓮華たる仏を産

み落とすという、離れ業をやつてのけた。つまりは、非有非無的諸存在を、衆生として扱つて、彼岸に渡したのだつた。毒桃色の非如来世界の非有非無存在を、自らの空洞の中に通じ抜けさせることで、紅蓮色の如来界に黄金色の仏として、現成させしめることをやつてのけたのだつた。まさに、救世主だつた。救世主とは、つまり如来の垂迹したものでしかないのだが。

しかし、これとはんでもない混乱を招いた。非有非無の如菩薩曼荼羅の世界が、たとえ聖マカロニで消化されたとはいえ、胎藏界と金剛界の曼荼羅の示す浮世世界に現成してしまつたのだつた。それは、如来界に新しい異形の存在を新生させる行為だつた。つまり、如来が菩薩に垂迹していた両界曼荼羅世界は、いまや紅蓮の大日輪の煌煌と輝く世界だつたが、その周囲に黒塊を拡げてえせ教祖の非如来化した非有非無すなわち如菩薩曼荼羅世界を形成していた。それが、聖マカロニの所為で、毒桃色のその永劫法国の地獄世界が、黄金色の仏となつて現実化したのだつた。すなわち、仏性を失つて永劫の貪欲を示していた非有非無世界の多重存在が、茎色のマカロニの口から吸い込まれていつて、消化されつつ螺旋を描いてぐるぐる回り、如来界に現

成して、諸行無常の形に整形されてしまったのだった。言いかえれば、黒塊を含めた非有非無世界は、聖螺旋マカロニの中を通るときに、聖の神通力で癖を付けられて、如来側の端から、黄金色でバネ型の仏に、射出成形されたのだった。

都合、如来の曼荼羅世界には、有形化して黄金色のバネ仏になった非有非無存在が、ぴよんぴよん跳ね回る結果となった。しかも、ビッグバンが膨らむよりも過激な爆発をした多重非有非無存在だったので、それらをすべて、掃除機のように吸い込む聖マカロニは、膨大な量の黄金色螺旋バネを、浮世世界に吐きだして有形化したのだった。聖は、もとより如来の垂迹したものだだったので、神通力巧みでその非有非無地獄の救済の奇跡は、まさに神がかりだった。さすが菩薩に垂迹した世界にあつても、如来だった。見る間に如菩薩曼荼羅世界は、現実化されて消去されていった。最後に残ったえせ教祖の非如来も、ついには聖マカロニに吸い込まれて、形を矯正されて一つの螺旋バネ仏と化した。

八、バトル・ダンス

かくて、菩薩だけだった両界曼荼羅世界は、非有非無の有形化した螺旋だらけの、バネ仏の雑踏と化した。聖マカロニは、地獄を消滅させた功德で、螺旋マカロニ如来になった。それは、言わずとした螺旋マカロニの形をした如来様だった。両界曼荼羅の中央に、蓮茎色の螺旋マカロニ如来が鎮座したのだった。

そして、国土はバネ仏という空容器で充たされた。なぜバネ仏が容器かといえば、縮むと力を蓄えられるし、跳ね上がる意志を内包できるからだ。それは「可能性」という無垢さと「挑戦性」という理念を、その形の中に既に刻み込まれていた。

しかし、一方では素となる材料の非有非無的存在が、えせ教祖に折伏された仏もどきの莊嚴する非如来曼荼羅世界だったので、矯正されたこもごものバネバネは、仏で有りながら、どうしてもエゴイズムを持ってしまったのだった。螺旋マカロニ如来の国土は、このように仏性を取り戻しても、エゴを拭いきれぬ迷妄多きバネ

仏群で埋め尽くされたのだった。バネ仏のエゴイズムは、どうしても世界を我が手に征服したがった。エゴイズムとは、つまるところこの世の征服が最終目的なのだ。なので許多のバネ仏群は、互いにしのぎを削って、ぴょんぴょん跳ね出した。それはバトル・ダンスであつた。こうして、螺旋マカロニ如来の新世界に小さな春が訪れたのだった。

往古の大日輪は、そうこうしているうちに、円熟してきていた。すなわち、暮れかかつて、光明を紅蓮色から黄昏色に変化させていた。大日輪の生命からして、春を過ぎ夏を越えて秋に落ち込んで、そろそろ死滅に向かう時節になっていた。老境の大日輪は、光明の神聖性が増幅していて、とても香り高かつた。つまり、以前からゲル如来の光明として充満していた芳香を強め、螺旋マカロニ如来の国土に芳香の恩恵を齎した。それは、すなわち、バネ仏群に嗅覚を与える契機になつたのだ。

バネ仏群は、聖マカロニにより、すでに光明を受けるべく仏性を備えさせられていた。それは、光明の恩恵をバネのエネルギーに置換させて、勢い良く飛び跳ねることを可能にさせていた。しかし、そのバネの生命力

たる仏性に、芳香的恩恵をさらに与えることで、バネは薫り高さを求めるようになったのだ。

薫り高いものは、ゲル如来が遷化してしまった今、大日輪しか放散していなかった。しぜん、凝りもせずにバネ仏たちは黄昏色の大日輪に向かつて虚空高く跳ね上がることとなった。しかし、バトル・ダンスだったので、空中戦が繰り広げられ、バネバネがそれぞれ虚空で衝突したり跳ね返ったりあちこちに飛び回り、虚空を自由に飛び回ったので、大日輪の周りは、黄金色の夜光虫の如きのバネバネが、集り群がる結果となった。それらは、あくまで虚空の出来事であり、此土は往古のゲル菩薩の溶融海が、石英色に漣を立てていた。

まるでわざとのものであるが、おかしいことに、エゴイズムは悪臭を発したので、強引に大日輪に近寄ろうとするバネ仏は、光明を失ってエネルギーを抜かれ、菩薩海に墜ちて行かざるを得ないのだった。なので、大日輪の周りをいたずらに彷徨するだけが関の山のバネバネが、いつまでたっても墜ちたり跳ね上がったりを繰り返して、バトル・ダンスを繰り広げていた。

バネバネは、それでもこの世を征服したかった。それには、大日輪の芳香を手にする必要があると、バネバ

ネは思つたらしかった。バネバネは、それぞれ個性的に、大日輪の芳香の恩恵を手にしようと、嗅覚器官を発達させた。たいていは、バネの一端に穴を開けるような形状に進化した。バネと言っても、一定の太さを持っているので、その先端に穴を開けて、そこから異空間の芳香を取り込もうとしたのだった。

しかし、芳香と光明はねじれの位置にあり、すでに与えられた仏性で享受できるのは光明の恩恵だけだった。芳香は、所業無常とは別次元の、恒常的恩恵だった。それを、バネ仏が手にするのは、一見不可能に思えた。しかし、中には天才とよばれる個性も、集団の中には出現することがあるのだ。バネ仏の中にもそれが出現してしまった。天才バネ仏は、まず自分の一端から穴を開けるように進化すると、その穴をバネのもう一端まで伸ばしていった。そこまでは、誰でも思い付く穴の貫通だった。それはただのバネのマカロニ化だったからだ。しかし、ここからがこの天才バネ仏は違った。下方の一端を風船のように膨らますと、一度華瓶状になつて、上の首の部分を長く伸ばしてヘアピンのように丸く反転して曲げ、下の胴の部分に突っ込んで胴の下の方と上の首の口を、互いに裏と表が相通ずるように、溶着してしまつたのだった。これは、すなわち、クライン

の壺というやつだった。そうすることで、天才バネは、自らの内と外とを繋げることに成功したのだった。

それは、仏国士がフラクタルなため、どの仏の中にも必ずある胎藏界と金剛界について、天才バネ仏自らの中で両界接統を、現実的に体現した形象だった。両界曼荼羅を合わせたので、胎藏金剛混合曼荼羅世界が出来上がった。しかし、宇宙の形象としては、元型的に、両界曼荼羅が無くてはならなかった。それで、胎藏金剛混合曼荼羅は、光明界曼荼羅と呼ぶものになり、その片割れとして、おのずと芳香界曼荼羅世界が、天才バネ仏の片手に開けたのだった。これは、新しい両界曼荼羅世界の発明であり、その中心に鎮座する如来とは、言わずとしたこの光明界と芳香界を配置させしめた天才バネ仏が、その発明の功德により、解脱して出来たクライン壺如来だった。黄金色のクラインの壺の形の如来で、大日輪と同様、芳香と光明の両恩恵を発していた。

クライン壺如来曼荼羅世界は、解脱するとクライン壺に合一することになる。つまり、世界の随所に所々出現する権巧現化は、すべてクラインの壺の形象をしていた。クライン壺曼荼羅世界では、解脱するときに、

かならずクラインの壺状になるのだった。つまり、悟りバネ仏は、すべからくクラインの壺の形象だった。それは、如来曼荼羅のフラクタルといったふうな自然現象だった。

光明界の大日輪が、とうとう沈む日が来た。大日輪は、燃焼しきつて、すべて黄昏色の光明と化し尽くし、終焉を迎える運命にあつた。光明界の冬だった。そのときに、大日輪からの芳香も、同時に放散し尽くされることになるのだが、芳香は、すでに恒常的であるので、搾取されない限りは、存在し続けた。大日輪が冬を迎え燃焼し尽くすと、やがてその黄昏色の光明の炎は、灰燼と化して上空から雪のように、はらはらと降り積もることとなった。まさに灰燼の雪だった。それは、光明界の冬に相応しく、灰色をしていた。大日輪は壮大だったので、すべての光明が灰と化して降り積もるには、一季節掛かった。つまり、冬季を迎えた。

ここで思うのは、国土のことである。遙か太古は、大日輪の感涙に潤う砂々で出来ていた。しかし、それはあくまで胎藏界の表象としてであつた。大日輪は、両界に影響を及ぼすものであるが、灰燼の雪が降るべく世界は、むしろ金剛界であつた。しかし、クライン壺如来の出世で、金剛界と胎藏界が同一世界に和合して

しまった。なので、国土の石英色の菩薩海の上に、光明灰燼の雪が降り注いでいたのである。しかも、螺旋マカ
ロニ如来の射出したバネバネは、大日輪が沈んで光明が受けられなくなったので、その海上に漂って黄金色つ
ややかにぶかぶか浮かんであり、光明の舍利たる灰色の雪を受けては、それを先端から中へ取り込もうと、
吸引する素振りを見せ始めていた。

そのとき、芳香界は、とても芳しさを立ちこめさせていて、海上のバネバネを誘惑した。光明の舍利たる灰
雪が此土に降り注ぐのは、かつての金剛界を胎藏界と合一したクライン壺如来の功德による現象だったの
で、みな天才バネ仏のやり方を真似て、クラインの壺のような形になろうと、一生懸命弁道し出した。どのバ
ネも、縮んでは跳ね上がり、延びては泳ぎ周りを繰り返して、互いに衝突しながら試行錯誤した。しかし、
如来化できる聖バネは二度と出現してこなかった。ただ、灰雪から芳香を嗅ごうと進化してしまつて、みな
形だけクラインの壺状に変形してしまつた。しかし、それは形だけであつた。形だけなので、あまり芳香の恩恵
を受けられなかつた。クラインの壺は、まさに「拈華微笑」の如来の拈りの利いた形象ではあつたが、バネバネ

としては、形だけそれらのようになっていても、解脱は出来ないのだった。

九、新春の天国

灰雪は、虚空からにしんしん菩薩海に降り積もつては溶融していった。石英色の菩薩海は澄榮に底を抜いて漣を揺らしていた。光明の涅槃を祝して、菩薩海の上に、あちらこちらで色とりどりの蓮花が咲き乱れた。灰雪は如来では無かったから、灰雪が降り来ても、菩薩海はそれらに対する蓮花座を作らなかつたものの、涅槃に感動して、澄榮な海上に、紅、碧、黄、緑、紫、桃、などの数々の調和した原色が彩られた。その蓮花の隙間に、黄金色のクライン壺バネが、灰燼を嗅ぐごとく壺の先端穴から灰燼を吸い込んで胎内に入られて、なかに溜め込んでいった。すると、灰になつても光明である雪は、クライン壺の内外のいやしくも象徴する金剛界と胎藏界を活性化させた。そして、クライン壺バネの多くが、光明の二重性の一面である芳香を、

灰燼を溜めた面とは逆の面に、享受しだしたのだった。それは、クライン壺という形象の顕わし示す仏印と、灰雪という光明の燃え尽きた舍利との、両方によつてはじめて齎された恩恵であつたが、クライン壺は外面から芳香の恩恵を受けて、それを発散し始めた。

その芳香は、澄榮な菩薩海を覆わんばかりの百色の蓮花に、慈愛の表象の薰風として漂った。それを見て、菩薩海は、端々から蒸発し始めた。光明もないのに海水が蒸発する先には、菩薩が逆に受容するものとして遍照すべく日輪を、予定していた。それは、蒸発した菩薩がプルシャに還つた反動の功德を溜めて、虚空に懸かりつつあつた。つまりは、天国が現成しつつあつた。

天国は、菩薩海が蒸発していったプルシャで覆われた、澄榮な菩薩海に百色の蓮花と黄金色のクライン壺が浮ぶ樂園だつた。菩薩海が蒸発する先に、新たな日輪が功德を集注されてまろく上空に掛かり、暖かく天国の海を照らし出すと、その光明を受けて未解脱の菩薩海水は、海水のまま成仏した。蓮花も、暖かき日輪の光明に成仏し、仏性をいよいよ輝かせ、存在を新たにした。そして、迷える懊悩仏のクライン壺が、内

と外を密に通わせ合いながら、光明を表面に受け内面の芳香持つ舍利を活性化し、ますます自らの芳香を強くしたのだった。

それは、新しい季節の始まりだった。

〈竟〉